夢見る少女と最果ての少年

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る少女と最果ての少年

【Ｎコード】

Ｎ８５７２Ｚ

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

子供の頃、行方不明（住んでいるところでは神隠しと言われている）になった幼馴染である早瀬夏海（はやせなつみ）を自分のせいだと後悔し続けている驫木恭介（とどろききょうすけ）

ある日、いつものように神社へ祈りに行くと、不思議な影を見る

神社の中を探しても何もなく、出ようとすると突然地震が起こり、家のことが心配で外へ出ると暗闇へと落下し、気がつくと異世界へ

そしてそこには探し続けていた夏海がいた

異世界戦闘系小説

小説&まんが投稿屋にて連載済み

プロローグ：後悔

「あのねあのね！私ね、ちょーのーりょくが使えるの！」
……ああ、昔の夢か
「ちょーのーりょく？」
あの頃。まだ幼かった頃。アイツが……早瀬夏海が姿を消す前
「うん！私ね、空を飛んだり、壁を通り抜けたり出来るんだよ！」
いつも変なことばかり言ってて、どこか他人とズレてて、寝ることが大好きな幼馴染
「すごーい！見せて見せて！」
あまりにも変なことを言うから、学校でも友達ができず、いつも俺と一緒にいた
「いいよ！でも、誰にも言っちゃ駄目だよ？私と恭介君、２人だけの秘密！」
「うん！」
「じゃあいくよ？……えーい！」
「……」
「あれー？」
「どうしたの、夏海ちゃん？」
「えーい！」
「飛べないじゃないか！夏海ちゃんの嘘つき！」
「嘘じゃないもん！昨日の夜は飛べたもん！」
「でも今は飛べないじゃないか！」
「昨日は飛べたもん！」
「夏海ちゃんの嘘つき！もういいよ！」
昔の俺はそのまま帰ってしまう。昔の俺の後ろでは夏海がうずくまって泣いている。まだ「嘘じゃない。嘘じゃない」と言いながら泣いている。……けど、昔の俺はそんなことを聞きもしないで歩いていく

行くな

心の中で昔の自分に叫ぶ。しかし、当然のことながら昔の自分の足は止まらない。これは自分の記憶を元に作られた夢。だから足を止めるかもしれない。……けど、止まったとしてなんだというのだ。事実は変わらない。この日を悔いても、どうにもならない。それはもう十分に理解している。けれど、この夢を見るたびに叫ぶ。

行くな

叫び続ける。昔は当事者。ただ、今となってはただの傍観者に過ぎない自分には、もうそれしかすることはない。叫び、何もできない自分を悲しみ、夢から覚め、いつもと同じ日を繰り返し、時たまこの夢を見て、叫ぶの繰り返し。ただそれだけだ。

悲しい日常

頭の真上から大きな音が聞こえてくる。普通ならありえない現象だが、今はベットに横になっている状態。俺は音の元である目覚まし時計の目覚ましを切り、上半身だけを起こすと、予想したとおり涙が流れた。周りにはもう克服したと言ってある夏海の消失。けれど、実際はこの通り。月に数回はあの夢を見て涙を流す。夏海がいなくなったのは自分のせいかどうかは分からない。……けど、おそらく……いや、絶対に、あの時夏海と一緒にいれば夏海はいなくならなかった。

あの日、いい加減に夏海に付き合いきれなくなり、怒って先に帰った後、夜になっても夏海が帰って来ないと夏海の親に言われ、不安になり大勢で探し始めた。まだ子供だった俺も一緒に探した。夏海の行きそうな所は全部探した。……けど、どこにも夏海はいなかった。大人は神隠しだと言った。この町には大きな神社があって、俺や夏海は勿論、学校の人もよくそこで遊んだりしていた。夏には肝試しに使えるほど夜中は不気味で有名な神社。町の人は未だに神隠しなどを信じていて、そこの神社の神様が連れて行ったと言った。俺はその時になって、自分の行動を嘆いた。なぜ、あの時夏海を置いていったのか。突然涙が込み上げてきて、泣いた。母に抱かれ、家に帰ってからも泣き続けた。そして泣き疲れて寝た。しかし、起きても自分のしたことを責める気持ちは治まらない。俺は神社に行き、神様にお願いした

夏海を返して下さい

勿論、そんな頼みが聞き入れられるわけがない。夏海は返ってこない。けど、今の自分に出来るのは願うことだけ。

俺は涙を拭き、制服に着替える。着替えた後にもう一度涙が出て

いないかを確かめ、目が赤くなっていないかを確かめる。もし赤くなっていたときは親にバレないよう、誤魔化す口実を考えないといけないから面倒だが、幸いにも今日は赤くなっていないようだ。
俺は荷物を入れた鞄を持って下に降り、リビングへ行った
「おはよう、父さん、母さん」
「おはよう」
「おはよう」
リビングの椅子に座って新聞を読んでいた父さんと、朝食の最後の仕上げをしている母さんに挨拶をして席に着く。季節は夏。もうじき夏休み。……ただ、高校3年生である俺にとって、夏休みは決して楽しいことばかりではない。夏海のことで普段から集中できていない俺は現在、志望校に行けるかどうかが怪しい。この機会にでも勉強しなければ、この不況の時代に高卒で働かなければならない。だから、この夏休みは遊ぶことは考えないようにしようと決めている。
俺は母に盛り付けられた朝食を食べらがらテレビを見る。親には受験のためにニュースを見ていると言っているが、本音では夏海の手がかりを探している。ご飯を食べながらニュースを見ていく。
【中学校に盗撮犯が現れる】【買い物帰りの主婦への轢き逃げ】【有名芸能人のスキャンダル】【連続殺人犯、とうとう捕まる】
ニュースをザッと見る。夏海に関するニュースは当然ない。今更見つかるわけがない。頭ではそう分かっていても、ニュースを見る。ニュースが中盤に差し掛かると、俺はテレビを消し、鞄を持って立ち上がる。
「行ってきます」
「いってらっしゃい」
両親に返事をして玄関を出る。外に出ると突然暑い空気に包まれる。俺はドアを閉め、一瞬止まるがすぐに歩き出す。夏になると毎年暑さで学校に行きたくなくなる。けど、行かないわけにはいかない。俺は暑さを気にしないようにしながら歩き続ける。家から学校

まで、幸いなことに坂は少ない。だから、夏のこの時期でも、そこまで体力は使わないで済む。元々運動神経だけならいい方な俺だが（それでも平均よりやや上な方だが）無駄な体力を使って、元々無いような集中力を更になくさないでいいのは嬉しい。

俺はそのまま淡々と歩き続ける。何も考えないように勤める。夏海のことを考えると、時間がいくらかかるかも分からない。考える必要はない。考えてはいけない。

学校に着くとチャイムが鳴るまで近くの友達と話をする。昔は夏海と一緒にいたせいか友達がなかなかできなかったが、今では仲がよい友達はいる。その人となんでもない話をする。いくら勉強があまりできないと言っても、休み時間にまで勉強をする気はない。

授業が終わるとそのまま家へ帰る。友達の中には遊びにいかないかと誘ってくる人もいるけど、俺はそれを断る。流石に放課後に遊ぶ暇はない。

家に帰ると、少し休んで勉強を始める。

……そして夜中になると、俺は外へ出る。あの日から毎日していること。

神社での祈り

その神社はなぜか山の中にあった。それも林の中に自然にできたであろう空地にポツンと建物がある。無人で、賽銭箱さえない。とは言っても、昼間にはそれなりに光が届くので、遊び場所としてはもってこいの場所。俺は手を叩き、神様にお願いする。

夏海を返して下さい

俺は基本的に神様を信じない。でも、夏海が消え、大人が神隠しだと言い、神隠しとしか思えない現状、神に祈るしかできることはない。俺は祈り終わり、目を開け、いつも通りに帰ろうとすると――

「え！？」
建物の中に何かが見えた。無人のはずの神社に人のような影。……いや、見えたのは上半身だけだから、子供の悪戯という可能性もある。けど、俺の頭の中からその考えはすぐになくなった。その考えをなくした理由などない。ただ、数年も祈り続けて、今日、突然人のような影が見えた。それだけだけど、俺にはその影が夏海のような気がした。俺はすぐに神社に近寄り、開けた
「夏海！」
しかし、そこには何もなかった。夏海どころか、悪戯の後さえなかった。けれど、俺は諦めきれずに中を探した。床に抜け穴はないか。壁に扉はないか。
……結局、そんなものはどこにもなかった。俺はそこに……中央に座り込んでしまった。見間違いかもしれない。いや、確かに影が見えた。悪戯かもしれない。いや、あれは夏海だ。夏海は消えた。嫌な考えを否定する反面、望みの可能性すら否定する。
俺はとうとう立ち上がった。そして、ここに来るのを止める決意をした。ここに来るから夏海のことを忘れられない。だから幻覚なんかを見てしまう。俺は最後になるであろう神社の中を見渡した。中は特になんてことはない作り。でも、何年もこの外で祈っていたのかと思うと、ただの建物には見えない。一通り見渡し、出口の扉に手を掛けた。その瞬間――
≪ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！≫
地面が揺れた
すぐに地震だと分かり、体勢を保つ。そのまま神社の中央へ。地震の揺れは長かった。しかし、構造がしっかりしているのか、神社は崩壊することなく、ホッとした。揺れが収まっても俺は数分、その場でジッとしていた。……しかし、結局はもう揺れることはなかった。俺は親の安否が気になり、すぐに立ち上がって、扉を開け、足を踏み出した……が、違和感があった。
何もない。感じるはずの板の感触が足から伝わってこない。そう

思った瞬間、体重を前にかけていたせいで前に倒れた。しかし、そこには地面がなく、暗闇が広がっていた

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

落ちる。一瞬、死の恐怖を感じた。が、その落下はすぐに止まった。背中に強い衝撃を受け、気絶してしまうのと引き換えに

ソフィア

目が覚めたときには見慣れない天井があった。木で作られた屋根。それは自分の家と同じなのに、どこか見慣れない。そこから自分がどうなったのかを思い出す。確か俺は神社にいたはず。その後、人の影を追いかけて中に入り、地震が起きた。そして……外に出ると落ちた。

その考えに至った瞬間、俺は跳ね起きた。こうしてはいられない。ここはどこなんだ

「やあ、起きたんだね」

突然声が聞こえ、反射的に声の方へ向いた。そこには３０代……いや、もしかしたら４０代ぐらいの男が立っていた。眼鏡をかけていて、背が高く、青色の目と髪をしていた。俺が４０代だと思ったのは、顔はまだ若そうなのに顔には無精ひげのようにひげが伸び、髪もボサボサでやつれて見える。白衣を着ていることから医者と思えるけど、まだここがどこだかも分からない。病院ならこんな木造なわけないし、俺が倒れた神社の近くには１つしか病院はない。その病院にこんな場所はない。

「何か後遺症はないかい？見たところ外傷はなく、頭にたんこぶがあったから、頭を打ったんだろう」

……この人は何者なんだろう。そもそも、青い髪が地毛の人などいるのだろうか？もし染めているなら、医者がそんなことをするのだろうか？

「もしかして……喋れないのかい？」

俺が考え込んでいると、医者らしき男性は椅子に座り、不安そうにそう聞いてきた。どうすべきだろうか。明らかに怪しすぎる男性。そして状況。……けど、ここがどこだろうと、とりあえず家に帰らないといけない。

「いえ、喋れます」

「ああ、よかった。黙ったままだから心配したよ」
その顔は本当にホッとしたようで、心から俺のことを心配していたのが分かった。とりあえず、悪い人ではなさそうだ
「あの……それでここはどこなんですか？」
「どこ？何を言ってるんだ。ここはファーディスト・アイランドだよ。」
ファーディスト・アイランド？
「君は……セントラル・シティーへ行くためにここへ立ち寄ったんじゃないのかい？」
どういうことだ？ここは日本ではなくファーディスト・アイランド。アイランドということは島だ。俺は日本とは違う島に来た？……とりあえず、なんとか情報を集めないと
「あの……ここは地図のどこに位置しているんですか？」
「どこ？……失礼だけど、やっぱり君は……頭を打って記憶が変になっているんじゃないかい？」
医者の男性はさっき以上に心配そうな顔をして俺を見てくる。……つまり、それだけこの島を知らないということは異常。これは……考えを改める必要があるかもしれない
「あの……今の自分の知識が正しいか確かめるために、今からの質問に答えてほしいんですけど」
「ああ。いいけど……」
まずは何から話そう。……そうだな。まずは一般的な常識からだ。
「この世界で一番大きな大陸って……なんですか？」
このぐらいの知識はこの男性ぐらいの年ならあるはずだ。
「セシルムさ」
「！……なら……ピラミッドや自由の女神って、分かります？」
この２つを知らない人は滅多にいないだろう。……けど、これを知らなければ本当に考えを変えないといけない。そして――
「いや、知らないな」
その言葉からも、表情からも、嘘をついているとは思えない。け

ど、セシルムなんて大陸は聞いたことがない。
「……」
「どうしたんだい？」
どうしよう。可能性としては２つある。
１つ目は初めから俺の知識が間違っている。頭を打ったショックで、おかしくなった。
２つ目は違う世界へ来た。
……けど、２つ目の可能性より１つ目の可能性の方がよっぽど現実味がある。頭を打つ前の俺は相当な夢想家で、頭を打ったせいで妄想と現実の認識が逆になった。そう考えた方が自然だ。……少なくとも２つ目よりは……
「……まあ、君の頭がおかしくなったのかは分からないけど、とりあえず自己紹介はしておくよ。僕の名前はアリュー。一応このファーディスト・アイランドの医者さ。もっとも、こんな老けたオッサンだけどね」
アリューと名乗った男性は俺を元気付けようとしたのか、そんなことを言って笑っていた。それを見た俺も少しだけだけど元気になって、作り笑いをする余裕は出きた
「よろしくお願いします。俺の名前は……」
「どうしたんだい？」
そこで止まったのは名前を思い出せないからではない。俺の名前は驫木　恭介。……けど、この男性はアリューと名乗った。この世界が例え異世界だろうと、俺の認識が変になっただけであろうと、この世界は存在する。そしてこのアリューという名前に対して驫木恭介というのは明らかにおかしい気がする。
「名前……思い出せないのかい？」
けど、この男性にどう言う？俺は違う世界から来たと言うのか？いや、それこそ俺の精神を疑われる。実際に精神異常ならともかく、あまりにも元の知識が豊富すぎる。もし単に頭を打つ前の俺が夢想家だったなら、おそらくここまでの知識はないだろう。それが否応

なく可能性の1つ目を消してしまう。だからこそ、今は敵を作るわけにはいかない。これから先、元の世界に帰る可能性を見つけるためにも、怪しまれないように、ただ、頭を打っただけ、ショックでちょっと変になった程度に思わせないといけない

「いえ。俺の名前は……ライです」

『ライ』。それは中学の頃、友達が付けたあだ名。『驫木』だから『轟く』で雷。いかにも中学生……というより、中二病者が考えそうな発想。とは言っても、その名前は1日で消え去った。だから、今思い出したのは奇跡に近い。

「そうか。ライというのか。まあ、頭が混乱しているうちは困るだろうけど、すぐに慣れるさ。セントラル・シティーに行くのだって、急ぐ必要はないだろう。どうせ決行まで後数ヶ月かかる。」

決行？

「あの。セントラル・シティには何があるんですか？何を決行するんですか？」

とりあえず今は知識がいる。混乱していると思わせたなら、何を聞いてもおそらく変には思われないだろう。なら、早めに聞けることは聞いておくに限る

「ああ、それは……。」

アリューさんはそこで言葉を止めると、何かを考え込むような仕草をしたかと思うと、逆に質問をしてきた

「その前に聞いときたいんだが、ソフィア様は分かるかい？」

「ソフィア様？」

様を付けるぐらいだから、偉い人なのだろうか？それとも神のような存在？

「分からないか。」

「はい」

「ソフィア様とは……う～む、なんと言うべきか……」

……つまり、やはり実体のない神のようなものだろう。口で説明できないということは、そういうことだと思ったけど……違った

「まず、ソフィア様は数年前、突然現れた。」
「現れた？」
「そう。そして、今も生き続けている。そして――」
そこでアリューさんは言葉を止めた。なぜなら、突然、外が騒がしくなったからだ。
「どうしたんですか？」
「そうだったな。今日はソフィア様の披露式の日。」
アリューさんはブツブツ言い出すと、突然「よし」と言い、立ち上がった
「まずはソフィア様を見に行こう。そうすれば、何かを思い出すかもしれない」
アリューさんは強引に俺をベットから起こすと、そう提案した。俺としても断る理由はないし、この人が言うソフィアというのが実体があるなら、見ておく価値はある。
そう思い、アリューさんに続いて外へ出た。外に出ると、人が村の中心に沢山集まっていた。どうやらここの家は全て木造のようで、歴史の教科書などで見た昔の家が思い出された。家は広場のような空地を中心に、円状に家が建っていた。そして、広場を中心に、十字の形の道があり、家の区画を４つに分けていた。
俺とアリューさんは人ごみをかき分けて広場の中心へ向かうと、広場の中心には大きな建物があり、人３人分ほどの高さがあった。そしてその頂上からは水が上から建物を伝って流れてきて、途中からその水は下の池までヴェールのように流れる。……しかし、周りの人はその噴水の水のヴェールを見るだけでソフィアと思われる人はどこにもいなかった
「あの……ソフィアさんは？」
「もうすぐ見られるさ」
アリューさんはそう言うと、他の人と同じように噴水の水のヴェールを眺めた。俺はどうすればいいのか分からず、ただソワソワすることしかできなかった。しかし、数分もたったころ、突然声が聞

こえた
「こんにちわ、皇国の諸君。」
その声は若く、アリューさんより若い男性のもののようだった。俺はその声に驚き、慌てて周りを見渡す。しかし、その中の誰も喋っているようでもなく、また、誰も驚いているようではなかった。
「アリューさん、これはいったい……」
「単なる放送だよ。……ほら、もう映像が出る」
映像？そんなものを映すスクリーンなど、どこにあるというんだ？俺がどうしたらいいのか、何が起こっているのか分からずにいると、突然、噴水の水のヴェールが輝きだした。しかし、その光は不思議と眩しくなく、直視してもなんともなかった。そして、その光が収まった瞬間、目を疑った。
噴水の水のヴェールに映像が映されていた
その映像には先ほどの声の主であろう金色の髪の若い男性が立っていた。立っているのはどこだか分からないが、後ろの映像は石のようで、アーチ上に作られていて、奥に通路が続いているようだ。この村の家とは作りそのものが違うようだった。
「さて、皇国の諸君。今日は月に1度のソフィア様の披露式。時間もありませんし……貴方たちは私の顔など見たくもないでしょう。なので、堅苦しい挨拶などなしです」
男はそう喋ると後ろに下がり、何かを喋った。すると奥の方から誰かが歩いてきた。左右に兜と鎧を着て槍を立てる護衛を従えながら、その中心に白いドレスを着て、顔には白いヴェールを着た女性。それは一見するとウェディングドレスとも見間違うようなドレスだった。おそらく、彼女がソフィア様。そして先ほどまで喋っていた男性は深く頭を下げ、彼女たちに道を譲る。女性は先ほどまで男性が喋っていた位置まで歩くと、そのヴェールを取った。そして……その顔を見たとき、俺の思考は一瞬停止した。
対照的な長く黒い髪。清楚な顔立ち。そして、その表情はほとんど無表情と言ってもおかしくはなかった。……けど、その女性は

――間違いなく……夏海だった

何年も探し続けてきた幼馴染が目の前にいた。他人の空似かもしれない。この数年で体格も成長していた。けれど、俺の直感が言っていた。あれは夏海だと。そして、女性は喋ることもせず、ただただこちらを見続け、数分後、こちらに背を向け、再び護衛を従えて歩いていった。

彼女が去っていくのと同時に、周りに集まっていた人たちも散らばり始めた。

儚い希望

「ライ。……ライ！」
突然、横で叫ばれた。少しの間、夏海を見たせいでの放心で自分の新しい名前へ対応ができなかった。
「とりあえず、家に戻ろう」
アリューさんは俺が体調を悪くしたとでも思ったのか、心配そうにそう言うと歩き出した。周りには既に俺たち以外の人の影はなく、2人だけになっていた。俺は慌ててアリューさんを追い掛けた

「それで、何か思い出したかい？」
家に着くとアリューさんはコーヒーのようなものを淹れ、俺を席に着かせた。
……しかし、俺はどう答えるべきなのだろうか。もし俺の直感が間違っていないなら、ソフィアは夏海だ。俺の大切な幼馴染。けれど、アリューさんたちはソフィアを神様のように扱っている。横目にだが、沢山いた人の中……特に老人はソフィアが現れたとき、手を合わせて拝んでいた。もしここで彼女は俺の幼馴染の夏海だなんて言ったら、どうなるか分からない。だから――
「いえ、何も」
「そうか……」
アリューさんは自分のことのように残念そうな顔をして、ため息をついた。そして、さっき自分にも出してくれたコーヒーのような黒い液体を一口飲み、話し出した
「じゃあ、ソフィア様について教えるよ」
「お願いします」
さっきまでは軽い気持ちで聞こうと思っていたソフィアの話。……けど、もう軽い気持ちでは聞けない。少しでも多く、ソフィアのことを知らなければならない

「まず、ソフィア様が数年前、突然現れたのは話しただろ」
「はい」
数年前、突然現れた。これはただ、俺がソフィアは夏海だと信じたい気持ちがそう思わせているのかもしれないけど、数年前、夏海は俺と同じようにここへ来た。俺にはそう思えた。……いや、それ以外は考えられない
「そして、正確にはどこにソフィア様が現れたのかは知らないけど、ソフィア様はセントラル・シティーで保護された。初めはただの迷子のソフィア様をどうするか考えていたとき、ソフィア様に関して、1つだけ分かったことがあった」
「分かったこと？」
「そう。ソフィア様は寝ている時、とてつもないエネルギーを生み出す。それがなんのエネルギーなのか、なぜそんなエネルギーを出せるのかは分からないけど、セントラル・シティーの科学者はそのエネルギーを使う装置を作った。結果、さっきのような映像などの高度な機械を使うことができるようになった。ソフィア様の力は膨大で、国全体に力を供給しても有り余るほどの力だったんだ。」
夏海にそんな力があったのは驚きだが、この世界で俺の常識は通じないと思った方がよさそうだ。この世界と俺の世界では根本的に違う、そう思うべきだろう。そう思えば、俺たちとこの世界の人の構造が違い、寝てるときに分泌される何かをこの世界の人は利用できたと考えられる
「……けど、ソフィア様だってずっと寝てるわけじゃあないでしょ？」
いくら寝るのが好きだった夏海でも、そんなにずっと眠ってはいられない。この世界がどれだけ広いのかは知らないし、夏海の力がどんなものか、どれだけ大きいのかも知らない。……けど、そんなにも長く使えるわけがない
「そう。だから、噂では強制的に眠らせてるんじゃないかなんて噂が流れていた」

「！……けど、それなら誰かが見に行けばいいじゃないか。会うことも許されないんですか？」
　その言葉を聞いた時、アリューさんの表情が暗くなった。俺はすぐに相当悪いことを聞かされると分かった。俺は次にどんな言葉が来てもいいように身構える
「こんな風に発達したのは、あることが起きてからなんだ」
「あること？」
「ああ。それまではソフィア様の力に頼ってはいたけど、いなくても生活できるほどだった。……けど、ある日、どこからか現れた者たちにこの地は侵略された」
「え！？」
「彼らは圧倒的な力でこの地を攻めた後、ソフィア様を誘拐して僕たちに無条件降伏を求めた。彼らはセシルムを奪い取り、そこを拠点にした。その後、無条件降伏を受け入れた僕たちの国は生まれ変わった。中には今の国の方がよかったと思う人もいるけど、僕はそうは思わない」
「……どうなったんですか？」
「彼らはソフィア様の力を僕たちにも供給して文明のレベルを上げた。ソフィア様を誘拐された時点で、僕たちは抵抗できなくなった。けど、文明のレベルを上げ、さらにソフィア様なしでは暮らせないようにすることによって、ソフィア様の人質の価値を上げてるんだ。噂ではソフィア様の力を利用する装置も、大本はこちらが作っていたらしいが、完成させたのはあちららしい。そして、ソフィア様を月に1度見せることで、生きていることも証明している」
　……これは予想以上だ。俺は初め、夏海を見たとき、呆然としたのと同時に喜んだ。アリューさん達の様子からすぐ会えると思ったからだ。……けど、実際は全く違う。夏海は今、この俺のいる国に対立している国にいる
「あの……なんとかしてソフィア様に会う方法はないんですか？」
　駄目もとで聞いてみる。もし会えるなら、とうに取り返している

だろう。攻めて来たときだって、圧倒的な力で捻じ伏せられたと言っていた
「残念ながらないよ」
答えは予想通り。俺は俯き、拳を握る。ずっと探していた夏海。その夏海を見つけた。……けど、決して手は届かない。ようは地上から見えない星が見えるようになっただけ。見えても見えないでも、決して届かない。
「……」
黙り込んだ俺をどう扱うのか迷っているのか、アリューさんは視線を迷わせながら言葉を選んでいる
「……その……」
「え！？」
アリューさんはゆっくり口を開き、言い難そうに口を動かし、視線を漂わせた。しかし、少しすると決意したように声を出した
「あくまで可能性なんだが……ソフィア様に会う可能性はないこともない……」
「本当ですか！」
「ああ。……けど、オススメはできないよ」
「なんですか！教えてください！」
例え危険なことだとしても、夏海に会いたい。そのためなら、なんでもやってやる。
アリューさんは教えるべきかどうか少しの間迷っていたが、ついには諦めたように口を開いた
「ソフィア様が誘拐されてから大体半年に1度、奪還作戦が行われる。」
「奪還作戦？……じゃあ、もしかしてセントラル・シティーで決行されるのって！」
「そう。奪還作戦。……だけど、僕は君にそれに参加してほしくない」
「え！？」

「なぜ、半年のように行われる奪還作戦を敵国は止めないと思う？」
「それは……」
確かにそれはおかしい。無条件降伏したのに攻めて来る敵を放って置くのはおかしい
「彼らは……絶対の力の自信がある。攻めて来ても、勝てる自信がある。だからこそ、攻めて来るのを咎めず、ただ、攻めてきた者を皆殺しにする。そうして力関係を分からせようとしているのさ」
想像してみる。いくら攻撃してもビクともしない巨大な岩。それは、攻撃している間に戦意を失わせ、諦めさせる
「だから、君がいっても死んでしまうだけなんだ。なぜソフィア様に会いたいのかは分からないけど、この方法だけはやめてほしい」
アリューさんはそれだけを言うと、立ち上がって家を出て行った。
俺は……どうすべきなんだろうか。夏海に会いたい。その気持ちは変わらない。……けど、会いに行けば確実に死ぬ。なんの武術の心得のない俺が立ち向かって勝てる相手ではない。なら大人しく引くか？……いや、そんなこともできない。ようやく会えたんだ。だから……夏海と一緒に絶対に元の世界に戻る。とりあえず、明日はこの世界のことを知ろう。なんでもいい、とりあえず知っておいて損はないだろう。決行までまだ数ヶ月あると言っていた。
結局、その日はアリューさんの家に泊めてもらうことになった。

原点

起きると誰もいなかった。上半身だけを起こして辺りを見渡しても、アリューさんもいない。昨日見た感じだと、この家に時計がないので時間は分からないが、南向きに入り口が作られているこの家の入り口に光が斜めから差し込んでいるのが見える。おそらく、もう昼近いのだろう。

俺はベットから起き上がった。元々この家はアリューさんの1人暮らしで、来客用の布団、ベットなどがない。だから俺は怪我人用のベットで寝ることになった。初めはアリューさんが客人をこんなところで寝かせるわけにはいかないと言い張ったが、元々俺はここをすぐ出て行くつもりだし、アリューさんに迷惑をかけるわけにもいかないのでこっちで寝たのだ。

俺は靴を履き、外へ出る。外に出ると昨日とは違い、ほとんど人がいなかった。俺はとにかくアリューさんを探すべきだと思い、噴水の所まで歩いた。

噴水までは近くで、家から出た瞬間にもアリューさんはいないと分かっていたけど、ここから四方に道が分かれているので、見やすいと思ってきたのだが……アリューさんの姿はどこにも見えなかった。

「あの。アリューさんを知りませんか？」

俺はちょうど近くを通りかかった洗濯ものを抱えた主婦らしき人に道を尋ねた

「アリューさん？彼なら北の方の森に行ったよ」

「北ですか？ありがとうございます」

俺はお礼を言い、主婦の人が指差した北の森へ歩いていった。

この村は東西南北が森に囲まれている。昨日地図で見た限りではそこまで大きな島ではないが、全体では一度迷うと二度と出られそうにないぐらいの広さはあるようだ。

昨日、アリューさんから聞いた話によれば、東の森には凶暴な動物などが住んでいて危険らしい。なぜ東にしか生息しておらず、繋がっているはずの北と南、そして村に入ってこないのかは村の人にも分かっていないらしいが、とにかく東は危険らしい。

そして西には逆に、大人しい動物が住んでいるらしい。最も、大人しいとは言っても東に比べればという話で、危険なことには代わりはないらしい。

南の森には森らしいところはなく、森の部分が少ない。数分も歩けば船着場に着く。東西に比べれば、なんの変哲もない、しかし、最も使う森らしい。

北の森にも生物は住んでおらず、薪を拾いに行くぐらいしか行くときはないと言っていた。

アリューさんが北の森へ向かったということは、薪の数が減っているのだろう。

この村は俺の住んでいた所とは比べ物にならないほど原始時代の生活をしている。野菜を自分たちで育て、狩りをし、手で洗濯する。アリューさんに聞いた話だと、セントラル・シティーでは自給自足などせず、聞いた限りでは俺のいた世界と近い生活をしているらしい。

俺はアリューさんを探しに森へ入った、森は案外明るく、木々の間から日が差し込んでいる。俺は地面から出ている木の根に引っかからないように歩く。木の根などにキノコがあったり、そこら中に枝や葉が落ちているが、これといってなんの変哲もない森。アリューさんから聞いた通り、動物もいない。虫や鳥なら飛んでいるが、害はない。俺はそのまま歩き続けていると、開けたところにアリューさんが屈んでいるのが見えた。

「アリューさん」

「ああ、起きたのかい」

「すみません。こんな時間まで寝てしまって」

「いや、気にすることないよ。よっぽど疲れていたんだろう」

アリューさんはそう言って笑うと、近くにあった茂みに近づいて調べ始めた。
「あの……何をしてるんですか？」
「ああ。昨日は言ってなかったけど、君が倒れていたのはここなんだよ」
「え？」
ここに……俺が倒れていた？俺は何もないのを承知の上で、辺りを見渡した。来た道にも、周りにも、当然何もない。木ばかりの空間。
「君はちょうど、この開けた場所の真ん中辺りで仰向けに倒れていたんだ。」
「……そうですか。助けていただいて、ありがとうございます」
「いや、気にすることじゃないよ」
「……でも、それでなんでここを調べているんです？」
アリューさんは茂みを調べ終わったのか、今度は木を調べながら話し出した
「君はこの中心辺りに仰向けに倒れてたって言ったよね？」
「はい」
「でも、その中心まで最も近い木を使ったとしても見ての通り１０メートルは確実にあるんだ」
確かに、中心までかなりの距離がある。頭にタンコブができていたということは、少なくとも頭を打っている。もっと狭い場所なら木から落ちたと考えられるが、この場所では明らかに無理がある。
「まあ、考えても仕方がない。とにかく、君が無事でよかったんだから、今後は気をつければいいさ。」
アリューさんは諦めたのか、そう言い、こちらへ寄って来た
「さて。僕はもう帰るけど、君はどうする？」
「……少し、ここら辺を見て行きます」
どうして神社から落ちるとここに着いたのかなんて分からない。けど、この辺りを探索してみる価値はあると思う。少しでもいいか

ら元の世界に帰る可能性が欲しい。夏海を取り返せたとしても、帰れなければ意味がない

「そうか。じゃあ、僕は家で昼食を作って待ってるよ」

そう言うとアリューさんは俺が来た道を歩き出した。俺はアリューさんが見えなくなるまでその後ろ姿を見送り、歩き始めた。

この場所はアリューさん調べたので、もう少し離れたところを探してみた。……けど、やはりなんの変哲もない森。

「……よし。もっと奥へ行ってみよう」

俺はそう決め、歩き出した。開けた場所からはどんどん離れていく。

影

……何分歩いただろうか。かれこれ数十分歩いた気がする。そして、ようやく今の状況がヤバイと分かった。辺りは昼だというのに真っ暗で、夜と大差ない状態になっていた。別に突然暗くなったわけではない。気づかないほどゆっくりと暗くなっていった。だからこそ、奥に来過ぎたのだ。俺は急いで反転して、来た道を戻り始めた。

「……」

しかし、一向に明るくなる気配などない。……いや、むしろ暗くなっている気がする。どうしよう。今どの辺りだろうか？このまま奥に進めば帰れるだろうか？ここは島だ。真っ直ぐ行けば、いつかは海に出る。そこから太陽で方角を確認して帰るか？

≪ガサッ！≫

「！」

突然、何か音がした。茂みが揺れる音。誰かいる！？いや、もしかしたら動物かもしれない。……けど、なんでこんな所に？しかし、俺は慌てて辺りを見渡すが、どこにも何もない。いるけど暗くて何も見えないだけかもしれないが、見たところ誰もいない。俺は警戒したままさっきまで向いていた方角へゆっくり体をむき直すと

「わあ！」

そこには何かがいた。暗闇の中、更に黒い何かの影。俺は驚きの余り座り込もうとしてしまうのを堪えた。しかし、膝は震え、一歩も動けなくなってしまう。辺りは暗いのに、更に黒い色で存在し、はっきりと認識できる。明らかにおかしい。少なくとも、普通の色ではない。いや、色ですらないとも思えるほどだ。その黒い影はその場でユラユラ揺れているだけで、害を与えてはこない。膝の震えは止まらないものの、ほんの少しだけ、考える余裕は出てきた。あれはなんなのだろうか？この世界は俺の世界とは違う。魔法や霊体

などがあってもおかしくない。そもそも、ソフィア……夏海の力だって、俺の常識では考えられない力だ。俺は警戒しながら、震える足で少しずつ下がる。アレがなんなのかは知らないが、あまり関わりになりたくない。元々ホラーが苦手な俺には精神的に毒だ。

その影は全く動かなかった。俺が後ろに下がっているのに気づいているのか、そもそも俺に気づいているのかさえ分からないが、全く動かなかった。

……いや、動かなかったはずだった。

しかし、影の大きさは変わっていなかった。大きくなることも、小さくなることもなかった。まるで俺が動いていないかのように。

俺は下がり続ける。しかし、状況は変わらない。俺の下がる速さは早くなる。……けど、何も変わらない。

しかし、変化は突然起こった。

影が……大きくなる。小さかった影。点とは言わないまでも、何の影だか分からないほどの小さな影がどんどん大きくなる。それは人の影のようだった。丸い頭の影に胴体のような影。そして４本の太い棒状の影。もしかしたら人ではないかもしれない。けれど、俺の頭に人以外でこの影と重なるものはない。俺は余計に怖くなり、ついには動けなくなった。例えば人の影だとして、なぜ影が暗闇ではっきりと見える？例えば人の影ではなかったとしたら、あれはなんだ？答えの出ない問いが頭を巡る。その間にも影はどんどん近づく。

ついには目の前にまで来た。影の大きさは俺よりも少し低いぐらいの大きさ。横に長いわけでもなく、逆に細すぎるぐらいだった。影は俺の方を見た。……いや、見たように見えた。見上げたのかどうかすら分からなかった。ただ、ほんの少し影が動き、見上げたような気がした。少しの間、俺と影は見つめ合っていた。目の見えない黒い影。俺は頭が恐怖でいっぱいになりながらも、なんとか逃げる方法を考えていた。頭の中で決して逃げられないと思いながらも、考えた。

そして、俺の考えが出るまでに行動を起こしたのも、影だった。影は俺の脇を通り過ぎると、そのまま歩いていく。危機は去った。頭の中でそう思った。あの影に害はない。俺はホッと息をつき、倒れこみそうになった瞬間――

≪ビクッ！≫

体が跳ねた。理由は分からなかったが、元凶は分かった。歩き去って行っていたはずの影が立ち止まり、こちらを見ている。さっきはなかった悪寒に似た感覚。あんなに近くで見たときは正体不明のものに対する恐怖しか感じなかったのに、それより遠くに離れた状態で見つめられただけで悪寒に似た感覚を感じる。自然と歯がぶつかり、カチカチと鳴る。そうこうしている間に影は手を伸ばしてくる。届くはずはない。自分からから……影から離れたのだから。けど、今の俺にとっては、どれだけ離れていても届くような気がした。影は手の形をした影を肩辺りまで上げると、停止した。もしそれが人なら、まるで助けを求めているような仕草。しかし、俺は近づかなかった。単純に怖かった。俺はそのまま後退しようとして――

「ア〝ア〝ア〝」

影が呻いた。その声は苦しげで、何かを求めるようだった。俺は後退しようと後ろへだした足が止まった。影に口などない。けれど、その呻き声は影が出したとしか思えなかった。俺は知らず知らずに足を前に出していた。罠かもしれない。この世界では何があるか分からない。……けれど、苦しんでいるのを見捨てられなかった。あの日、夏海を見捨ててしまった日から、もう二度と自分の前で誰かが苦しんでいるのを見たくなかった。あいかわらず足は震えていたが、自分から影に近づいた。

「ど、どうしたんだ？な……なんでそんなに苦しそうなんだ？」

恐怖で震えてうまく言葉が喋れない。けれど、震える口でなんとか喋った。

「ア〝ア〝ア〝ア〝」

しかし、影は呻くだけで、依然と手を差し伸べてくる。俺は躊躇

った。もし掴めば、いきなりどこかへ引きづり込まれるかもしれない。

……けど、俺は掴んだ。

やっぱり見捨てておけなかった。例え相手が正体不明のものでも、見捨てられなかった。掴んだ瞬間、景色が消えた。……いや、正確には、闇が消えた。目の前がグニャッと歪んだかと思うと、暗闇が吸い込まれるように消えていった。俺は突然明るくなった光景に目が開けられなくなった。

白銀の剣

「くっ！」

何も見えず、再び暗闇となった。しかし、今度の暗闇は瞼の裏の光景。俺は次第に目が開けられるようになり、ゆっくりと目を開けた。

すると、そこには湖があった。目の前に湖。その中央には祭壇のような建物があり、そして背後と左右には森。まるでさっきまで迷っていた森を抜けたみたいだ。俺は歩いて湖に近づいた。湖を覗くと、自分の顔が写った。鏡に反射されるかのように、はっきりと映った。普通ではありえないほどの綺麗な湖。そしてその湖にある祭壇は、ここから見えるだけでも綺麗だった。まるでここは時間が止まっているかのように、汚れがなかった。もしかしたら村の誰かが整備しているのかもしれない。そんな考えが頭をよぎったが、すぐにそれはありえないことだと理解した。ここは森の中であり、木は沢山ある。なのに、湖には葉が１つも浮かんでいない。いくらなんでもおかし過ぎる。しかし、不思議と恐怖はなかった。まるでここはそういう場所なのだと、頭で納得しているようだった。もしかしたら驚きの連続で理解が追いついていないだけなのかもしれないが、今の俺にとってはどうでもいいことだった。

俺は祭壇を眺めた。形はまるでピラミッド。しかし、三角形の頂点は平らで、中途半端な三角形だった。そしてここから見える正面に何段もの階段が湖から伸びて頂上へ続き、その両端はなだらかな坂となっていた。それはいくつもの石を積み上げてではできないほどで、１つの巨大な石を削って作られた物のようだった。

そして、そこでようやく気づいた。影がいない。俺は辺りを見渡す。背後、森、湖、祭壇。どこにもいない。俺は森に入った。もしかしたら、森にいるのかもしれない。森を歩く。森の中は初めのように明るく、見通しが利く。俺は辺りを見渡しながら歩く。しかし、

影はどこにもいない。とうとう、森を抜けてしまった。俺は仕方ないと諦め、そのまま村に帰ろうとして……足が動かなかった。

目の前には湖と祭壇があったからだ。さっきと変わらない状態で、そこにあった。俺は確かに真っ直ぐ進んだはず。しかし、ここへ出てきてしまった。俺はすぐに振り返り、走った。辺りを見るなんてことをせず、真っ直ぐ走った。すぐに森を抜けた。しかし、目の前には依然として湖と祭壇が現れる。俺はその場に座り込む。……いや、正確には崩れ落ちた。ゲームなどで迷いの森などという場所がある。俺は今、そこにいる。そうとしか考えられなかった。俺は放心状態寸前でなんとか心を食い止めた。ここで放心しても意味はないと思ったからだ。その瞬間、目に光が飛び込んできた。正確には、見ている方向の先で何かが光った。その光は祭壇の頂上からきていた。

「なんだ……あれは……」

初めに見たときは見えなかった。いや、そもそも大きさ的に見えず、たまたま今回は光が反射しただけなのかもしれない。俺は光を手で防ぎながら、ゆっくりと湖に近づく。あの光がなんなのかは分からない。……けど、今はあそこにしか可能性はない。俺は湖に入る。湖は思った以上に浅く膝程度の深さしかなかった。俺は安心し、ザブザブと進んでいく。だが、その安心もすぐ不安へ変わった。祭壇に近づくに連れて、どんどん深さが増していった。足は侵食され、腰まで侵食され、ついには首まで侵食された。目算で祭壇まであと5メートル。しかし、思った以上に水を含んだ服は重く、水の抵抗も手伝って上手く進めない。

なんとか祭壇まで着いた時には息が切れ切れで、その場を動けなかった。息が整うのにどのくらい時間を使ったのかは分からない。けど、明らかにずいぶん時間が経っていた。いつ頃から変化していたのか気づかなかった。いや、もしかしたら、突然変化しのかもしれない。とにかく、辺りが真っ赤に染まっていた。オレンジではなく、赤。空を見上げると、赤い太陽が輝いていた。改めて、ここが

俺の知っている場所ではないことを知る。……いや、アリューさんたちのいる村でさえ、太陽は俺の知っている色だった。けれど、ここは違った。俺は未だに疲れている体に鞭を打ち、起き上がった。息は既に整っていた。問題は体力。思った以上に湖を進むのに体力を奪われた。

俺は起き上がり、祭壇を見上げた。近くで見るとその巨大さが分かる。頂上が見えないほどとは言わないまでも、登る気をなくすには十分過ぎるほどの高さがある。一体、誰が何の目的でここを作り、影はここへ連れてきたのかは分からない。けど、俺には今、この祭壇を登るしか希望は残されていない。

俺は階段に足をかけ、昇って行く。そして疲れたら休む。どれくらい時間が経ったのかは分からない。昇ってるとき、もしくは休んでいるときに突然、もしくはゆっくりと世界が暗くなったり、明るくなったり、赤くなったり、青くなったり、白くなった。規則性があったのかもしれないけど、疲れている俺にはそんなことを考える余裕なんてなかった。ただ、暗くなったときだけ止まる。それだけを守り昇る。途中から上は見ないようにした。もし上を見れば挫けるかもしれないから。

そしてとうとう、俺は昇りきった。俺は最後の一段を倒れこみながら踏んだ。体力は限界。湖を渡ったとき以上の疲れが体を支配する。倒れている間、視界の端で何度も色が変わった気がする。もちろん、疲れていた俺に確かなことは分からない。

３０分ほど経った頃、ようやく動けるようになった。もちろん、時計などないので感覚だが、そのぐらい経った気がした。

俺は立ち上がり、初めて頂上の景色を見た。まず初めに目に写ったのは輝く剣だった。実際に輝いていたのかは分からない。けど、光を反射するほど汚れのついていない刃。そして、この剣には鍔がなかった。更には、柄までもが鉄でできているかのように輝いている。……いや、もしかしたら、柄などなく、全てが刃であるのかと疑うほどだった。しかし、近づいてみるとやはり柄はあり、銀色の

木刀を両刃にしたような感じだった。それが頂上の中央辺りに刺さっていた。俺は改めて辺りを見渡す。頂上は平らで、剣以外は何もない。瓦礫や葉すらなかったし、地面もひび割れすらなかった。まるでつい最近作られたかのような作り。俺は端の方へ行き、森を見る。森はどこまでも続き、村は見えなかった。

「さて……どうするか……」

ここに昇ればなんとかなるかと思ったが、そうではなかった。あったのは剣だけ。……いや、何かはあってくれたと思うべきか。人工物があるということは、一度は誰かがここへ来たことがあるということ。……あるいはあの影がここへ来たことがあるのかもしれない。だとしたらなぜ影はここへ連れてきたのだろうか。剣を俺に渡すため？考えられるのはそのぐらい。確かに今の俺には剣は必要なのかもしれない。夏海を取り返すためにも必要になるだろう。けど、影がなぜそのことを知っている？いや、もしかしたら、他に理由があるのかもしれない。

考えても結局は分からない。俺はもう一度景色を見た。とりあえずあるのは剣だけ。俺は結局、剣の柄を握った。せっかく昇ったのだから、降りるにしても剣だけは持っていかないとただの骨折り損だ。俺は剣を思いっきり引っ張った。……しかし、思ったより深く刺さっているのか、片手では抜けない。俺は両手で掴み、思いっきり持ち上げる。その瞬間、さっきまで抜けなかったのが嘘のように抜け、仰向けに倒れてしまう

「いて～……」

俺は剣を片手で持ち、ぶつけた部分を摩りながらもう片方の手にある剣を見て、驚いた。剣が錆びていっていたのだ。手で握っている部分から徐々に輝きを失うように、ゆっくりと。俺は驚きの余り剣を投げ捨てた。剣は地面にあたり金属音がしたが、錆び付くのは止まらない。そしてとうとう、剣の全身が錆び付き、さっきまであった光輝く剣はそこにはなかった。あるのは錆びた、今にも折れそうな剣。俺はゆっくり剣に近づき、持ち上げた。手が錆びることな

んて、当然ない。握る前まではそのことを恐れたけど、そんなことはなかった。剣は重く、片手で振ることは難しそうだった。長さは俺の身長より短く、漫画などで見る一般的な剣と同じぐらい。違うのはやはり鍔がないことぐらい。俺はズボンのベルトを外し、剣と一緒に体に巻きつけた。長さはギリギリ足りて、うまく剣を固定できた。別に錆びた剣などいらないけど、なんとなく、このまま捨てていったらここまで来た意味がない気がしたのでとりあえず持って降りる。降りるときは昇るときと違い、楽に降りられた。聞いた話では昇りより下りの方が体力を使うらしいが俺は下りの方が楽に感じる。

階段の真ん中あたりで初めて認識の甘さを感じた。この祭壇は湖に囲まれていたのだ。剣を背負っていない状態でも苦労したのに、剣を背負っている状態で渡れるのだろうか？不安に思いながらも、降りるしか道はない。頂上へ行っても、もう何もない。ついに一番下まで降り、目の前に湖が広がった。俺は決意を固め、湖に入る。そして、だんだんと腰、首と侵食される。剣の重さを加え、ゆっくりとでも進みながらあと少しというところで、足が滑った。……いや、違った。地面が消えた。足元にあるはずの土が消えた。突然のことに戸惑いながら、なんとか首だけを水面上にだそうとするものの、服の重さと剣の重さでうまく泳げない。しかし、なんとか泳いで岸に手をかけようとした瞬間――

「うわっ！」

何かに足が引っ張られた。俺は湖の中に引き込まれ、なんとか上へ上がろうとするも足を引く力は強く、下へ落ちる一方だった。俺は足を引っ張っているものを外そうと引っ張っているものを見た瞬間、口から息が全部出てしまった。そこにいたのは影であり、その後ろには底の見えない暗闇。その光景はまるで死神が冥界へと連れて行っているように見えた。俺は必死でもがきながら足を掴んでいる影の手を外そうとするが、全く動かない。そしてとうとう、俺の息はもたずに気を失った。

始まり

「……！……い！……え…！」
誰かの声が聞こえる。男性の声だ。
「おい！聞こえるかい！？おい！」
ゆっくりと目を開けると、目の前には必死なアリューさんの顔があった。
「よかった。」
「……あれ？……ここは？」
確か、俺は影に湖に引き込まれたはず。周りを見渡してみると、周りには木があり、まるでアリューさんと別れたところ。……いや、おそらく、アリューさんと別れたその場所なのだろう
「帰って来ないから心配になって来てみたらここに倒れてたんだ。何をしていたんだい？」
アリューさんが怪しむように俺の方を見てくる。……どう言えばいいんだろう？影に意味の分からないところに連れて行かれた？いや、そんなことを言っても信じて貰えないだろう。……いや、そもそもあれは夢だったのかもしれない。
「まあいい。無事でよかった」
アリューさんは困っている俺を見るとそう言い、立ち上がった
「とりあえず帰ろう。歩けるかい？」
「はい」
俺は立ち上がろうとして……後ろに倒れてしまった
「どうしたんだい？……て、なんだい、その剣は？」
「え？」
そう言われて後ろを見ると、俺は剣を背負っていた。錆びた剣をベルトで体に固定して担いでいた。……つまり、さっきまでのことは夢じゃないってことか。
「それにしても、凄い錆びだな」

アリューさんが興味深そうに剣を見る。
「……奥で落ちていたのを拾ったんです」
俺は本当のことを伝えることもできないのでそう答え、立ち上がって歩き出した。アリューさんもそれ以上を聞かず、一緒に歩き出した
帰ってからの問題は1つだった。夏海を助けに行くか、このまま帰るか。昨日までは夏海を助ける考えに揺るぎはなかった。けど、さっきのことがあってから考えてみた。今まで何人もの人が夏海を助けられなかった。それなのに、俺みたいななんでもない一般人が助けられるのか？影に会ったとき、怖さで全く動けなかった。もしあれが有害な者だった場合、俺は確実に死んでいた。それならこのまま帰った方が命の危険もない。アリューさんもセントラル・シティーには行って欲しくないみたいだし、この家にしばらくは置いてくれるだろう。そのままゆっくりと帰る方法を考えればいい。
少しの間、考え込んでから笑いが込み上げてきた。ここにいたからといって、確実に帰る方法が分かるわけじゃない。それに、帰る方法を探している間に何回夏海を見る？月に1度の披露式。それを見るたびに助けに行きたくなるか、見捨てた自分を殺したくなるだろう。帰れたとしても、向こうの世界で嘆き続けるだろう。なら……死んでもいいから助けるべきだ。悲観的な考え方をすれば、あのときの夏海は全てを諦めてるような目だった。幸せなどないのだろう。だから、俺が会えずに死んでも夏海はこのままの生活を続けるだけだ。余計な悲しみも希望も与えることはない。
俺は決心すると、アリューさんに行くことを伝えた。アリューさんは残念そうな顔をしたけれど、結局は自分は止める権利はないと言い、許可した。明日の昼、この村の南の船着場に船が来るらしい。それを逃すと1週間は来ないらしいので、ある意味丁度いいタイミングだ。
昼、船着場に船がやってきた。見送りはアリューさんだけ。元々2日しかいなかったし、アリューさん以外と交流をもっていない。

俺は錆びた剣を担ぎ、左の腰にはアリューさんがくれた刀が刺さっていた。アリューさんの家の家宝らしく、俺は断ったのだけど、アリューさんに使い道はないらしいし、背中の錆びた剣では戦えないだろうとくれたのだ。もちろん、この錆びた剣を捨てるつもりはないので背負っている。もしかしたら何かに使えるかもしれない。

「それじゃあ、行ってきます」

「ああ。生きて帰ってくれよ」

アリューさんに挨拶をすると、俺はそのまま船に乗り込んだ。船が出るまであと数分。あまりダラダラとはできないし、たった2日の関係。話すこともあまりない。

船は簡単な作りだった。簡単な作りといっても、大きさ自体は凄く大きかった。まるで豪華客船と間違うほどだった。アリューさんが言うには、この船は他の大陸全てを回るらしい。他の船は大きな大陸だけで、週に1度のこの船はこの村のあるファーディスト・アイランドを含む小さな大陸も回る。だから何日もいろいろなところを航海するので、自然と大きさも大きくなり、客にも1人1部屋とまでいかないまでも、3人1部屋となっている。ただ、この船の特徴はもう1つあって、ソフィア様奪還作戦の者はお金を払わなくていいらしい。それについてはアリューさんにこれ以上負担をかけなくてホッとしたが、4人1部屋の部屋に泊まることになってしまった。それも男女混合。

「えっと……初めまして。ライと言います。よろしくお願いします」

部屋は思ったより大きい。ベットが4つあるくせにソファーなどの家具すら揃っている。そこらのホテルと同じくらいの充実感はある。

ただ問題はルームメイト。俺が挨拶をするのに躊躇った理由。第一に、俺を除いて男性は2人。女性は1人。

1人の男性は無表情だ。というより、いつも怒っているような顔。白髪で年は2，30代だろう。座っているので正確には分からないが、長身で睨まれでもしたらそこらの不良なら一瞬で逃げるだろう。

そして、最も恐ろしいのが背中の剣。その剣は『W』の形に畳んで背中に背負っていた。もしアレが一直線に伸びたなら、大人2人分ほどの長さにはなるだろう。
女性の方もまた無表情で剣の整備をしていた。青い髪で背は一般的な身長ぐらい。特に鍛えているようには見えないが、なんとなく熟練者のような雰囲気を出していた。おそらく年は20代。整備している剣はさっきの男の剣どころか、俺の剣と比べても少し小さく、2本持っていることから、おそらく二刀流なのだろう
もう1人の男性は違う意味で怖かった。前までの2人で作られる暗く重い雰囲気の中、ニヤニヤしながらチョコののようなものを食べながら俺の方を見ている。赤い髪でニヤニヤしているとはいえ目は鋭く、まるで品定めをされているような感覚。背は俺と同じぐらいで、20代前半だろう。腰には左右にそれぞれ2丁づつ銃がホルダーに収められている。
「……」
「……」
「……」
その3人は喋ることもなく1人は無表情でソファーに座り黙っていて、1人はこれまた無表情に剣の整備をしていて、1人はニヤニヤとこっちを見続けている
「えっと……」
俺はどうすればいいのか分からずにただ立ち尽くしてしまう。別にはしゃげと言う訳じゃないけど、ここの空気は重たすぎる
「……ヴィンセントや」
突然、ニヤニヤしてるだけだった男がそう言ってきた。声は思った以上に若く、もしかしたら俺と同い年ぐらいなのかもしれない
「あ、ああ。よろしく。他の2人は？」
俺はその勢いをなくさないために、すぐに他の2人に話しかけた
「クリス」
「……アラン」

１人が話してくれたからなのか、残りの２人も無表情で動作は変わらないものの、ちゃんと名前を答えてくれた。女性の方がクリス。声からしてやはり３０代くらいだろう。アランという男性の方は声が低く、３０代もしくは４０代かもしれない。ただ、肉体的には３０代……いや、２０代のようにも見えるほど鍛えている

「よろしく」

俺はなるべく明るく言ったものの、名前以外を言う気はないのか再び沈黙と空気の重たさが部屋を支配した。俺はどうすることもできず、とりあえずベットに座った。部屋に一番近いベット以外は荷物が置かれていたので、俺のベットは一番手前。そこに座り込み、これからどうするべきかを考える。アリューさんの話では、この船で約２週間かけてセントラル・シティーへ向かうらしい。直線で向かえばそう遠くないらしいけど、この船は全ての大陸を回るので自然と遠回りになってしまうらしい。なら、初めにするのはこの３人との友好を深めることか？俺はもう一度３人を見渡してみた。クリスは１本目の整備を終えたのか、ベットの近くにある椅子に座って、１本目の剣をベットに置き、２本目の剣の整備をしている。正直、何をしているのかは分からないが、剣を眺めては軽く振り、地面と平行に構え、また眺めるの繰り返しを無表情でしている。アランはソファーで腕組みをしてただ真っ直ぐどこかを見つめている。視線の先には窓があり、外が見えるが、景色を見ているわけではなさそうだ。ヴィンセントはやはりニヤニヤしながら、今度はガムを噛みながらベットに座って俺の方を見ている。……正直、この３人と友好を深められるのだろうか？

模擬戦闘

「……ライ……」
「え！？」
突然話しかけられた。話しかけてきたのはヴィンセント。今までニヤニヤしていながらも品定めをしていたような目だったにも関わらず、今はなぜか笑いを堪えてるような顔をしていた
「な、何？」
「あんさんは間違っとる」
どういうことだ？何を言ってるのだろうか、こいつは……
「何を言ってるのか分からんようやけど……あんさんはここに入ってきた時点で間違った行動をしとるってことや」
「どういう……ことだ……？」
何か間違った行動をしたか？俺はただたんに自己紹介をしただけだ。同じソフィア様奪還作戦をする仲間として当然の……最低限のことじゃないのか？
「はぁ……」
俺が全く分からずにいると、ついには呆れてため息をついたかと思うと……口の中にあったガムを突然飛ばした。そのガムは一直線に俺の横を通り過ぎ、その先にあったゴミ箱に入った
「な……」
正直、凄いと思った。日常生活には全くの価値もないけれど、まるで『これが俺の実力だ』と言ってるような、まるでその腰の銃でも同じ……いや、それ以上の正確さで打てると言ってるような気がした。事実、俺が一瞬ゴミ箱を見て再びヴィンセントの方へ振り向いた時には、いつの間にか両腰のホルダーから銃は抜かれ、２丁の銃口は俺の方向へ向いていた。そして、ヴィンセントの顔からニヤニヤは消えて、本気で殺す気のような目をしていた
「もし俺が敵なら……あんさんは既に蜂の巣や」

異常だと思った。いきなり銃を向けられるとは思ってなかった。この４人は仲間のはずだと思っていた
「仲間に武器を向けるわけがないって顔をしとるが……ここにいるから仲間ってわけじゃないんや。裏切り者がいないなんて保障は誰ができるんや？」
そう言われればそうなのだが、そんなことを言えば全てが疑わしくなってしまう
「これは先輩からの忠告や。信じるなら信じるに値するだけのことを証明してから信じろ。自己紹介なんてその先や」
ヴィンセントは未だに殺す気の目で言ったかと思うと……突然『まあ、』と腰に銃をしまい、ニヤニヤ顔になって話だした
「ライの場合は弱者なうえに考えてることが顔にでるんや。この２つで裏切りものではない、または裏切ってもすぐに殺せるってことで信用するんやけどな」
ヴィンセントはニヤニヤ顔に戻ったが、顔にははっきりと裏切れば容赦なく殺すと書いてある。信用するとは言っても、それは自分を殺しはしないという信用。そして、殺されかけても、咄嗟の判断だけで俺を殺し返すことができるほどの力の差を認識しているということだ。
「それに比べてそこの２人。クリスさんとアランさん……やっけ？お２人さんは信用できへんな」
ヴィンセントはニヤニヤ顔のまま２人を見る。しかし、２人はそんなことは気する様子はない。そしてヴィンセンはため息をまた１つつき、自分のバックから何かを取り出そうとし……目にも留まらぬ早撃ちでアランに向けて弾を撃った
「危ない！」
俺が叫ぶのと弾が壁に当たるのはほぼ同時だったと思う。しかし、アラン本人はそんなこと気にしないのか、全く気にせずに動かなかった。弾が当たらないことが分かったのか？
「……ヴィンセント。次は斬る」

アランは小さくそう言ったものの、静かな船内では思った以上に音は伝わり、はっきりと殺気を込めているのが分かった。もし俺本人に向けられていたなら確実に腰が抜けているだろう。しかし、ヴィンセント本人はそんなものは気にならないのか、全く動じずに既にバックの中を漁りながら「はいはい」と適当に返事をしていた。

これからどうなるのだろうか。こんな異常者集団の中で2週間暮らせるのだろうか

「まあライ。俺からすればあんな危険なオッサンや俺が撃ったのすら気にせずに整備するねぇさんよりあんさんの方が安心して仲良くできるんや。よろしくな」

俺としてはヴィンセントもアランもクリスも危険人物に変わりはない。……けど、一応は俺に対して敵意を向けない……というより、向ける気さえ失せるほどの雑魚という認識なのだ。一定の距離を保った仲は維持すべきだろう。それに、他の2人と比べて喋る方ではあるようなので、俺としてもやりやすい。

「それで、ライはなんでこんな作戦に参加するんや？」

前言撤回。2人と比べるまでもなく、喋りたがりのようだ。

「悪いけど、秘密だ」

ただ、だからと言って夏海のことを話すわけにはいかない。話しても信じないだろうし、変に思われるのも嫌だ

「そうかそうか。まあ、何でもいいわ。どうせ失敗する作戦や。残り少ない命を大量虐殺して終わらせたいだとか死ぬときは国を発展させてくれたソフィア様のために死にたいとかそういうのやろ？」

後者は当たらずも遠からずだ。夏海を助けたい。けれど、死ぬ気はない。

「ま、どちらが目的やとしても、他の目的やとしても、さっさと死んだらつまらんやろ。少しでもその腰の剣を使えるようにするんやな。そのヒョロヒョロな体じゃあすぐ死ぬわ」

まるでそんな姿もそれはそれで見るのが楽しみだという声でそう言うと、ヴィンセントはベットに横になり、すぐに寝息をたてはじ

めた
　これからどうしよう。残りのアラン、クリスとは仲良くできそうもない。ヴィンセントに言われたように少しでも剣を振っておくか？確かここより2階下に行けば奪還作戦に参加する人専用の訓練所があったはずだ。
　俺は立ち上がるとドアを開けて部屋を出た。2人に声をかけようかと迷ったが、声をかけてもどうせ返事は来ないだろうと思い、黙って出た。
　目的の場所に着くと、予想していたのとは違う光景があった。そこには人が1人入れるほどの球体がいくつも置いてあり、それら1つ1つに番号が振ってあった。入り口近くに張ってある紙を読んでみると、説明は簡単だった。
　近くにある機械で登録し、今空いている所を確認。その後、その球体に入ると本人の情報が全てインプットされ、バーチャル世界に投影される。そこで戦う敵を設定し、戦う。ただそれだけだった。安全に実践ができるというわけだ。もちろん、怪我を負えばそれと同等の痛み。即死の場合などは軽減されるが、あくまでも現実感を出すために痛みもなるべく再現されるらしい。
　俺はすぐに空いてる機体を探し、それに入った。中は狭く、1人用の椅子が1つあり、楽にできるようになっていた。俺はそこに横になり、説明通りに準備をしていった。すると、すぐにバーチャル世界に入れた。そこは何もない空間だった。真っ暗で、まるで影と出会った空間。それを思い出した瞬間寒気がしたのでとりあえず忘れることにした。
俺はまずは少しでも刀を使えるようにするために簡単な動物からやることにした。
「ウサギ、キツネ、ライオン、クマ、ニワトリ、ヒョウ、チーター」
　何でもいた。ただ、どれも微妙な気がする。ライオンやヒョウに勝てるわけないし、ウサギやキツネだと実践的じゃない。凶暴性などを設定できるけど、やはり敵は人間。俺は敵の設定を人間にし、

いろいろ調べてみた。その中に自分と戦うことができる項目を発見した。これなら実践的だし、そこまで力の差はでない。そう思い、まずはこれにした。地形は平らな草原にし、さっそく投影。投影すると暗闇は薄れていき、草原が広がった。俺は驚きと感動で辺りを見渡した。少し見とれていたが、土を蹴る音で我に返った。そこには錆びた剣を背負い、腰に刀を差した少年……つまり俺がいた。俺は刀を抜く。刀は背中の剣より軽く、片手でもギリギリ扱えそうだ。しかし、俺は両手で構える。相手も両手で構え、こちらの出を窺っている。俺がどうしようか迷っていると、突然、向こうからかけて来た。俺は突然のことに戸惑いながらも振り下ろした刀を刀で受け止める。設定の段階で多少凶暴性を上げていたために、俺が来ないので向こうから来たのだろう。そしてその所為なのか、容赦なく刀を振り下ろしてきた。刀と刀はカチャカチャと音をたて、一向に離れない。……いや、むしろ近づいている。力は同じだけれど、体勢の問題ややる気の問題がある。俺は思いっきり力を込めて敵を押し返し、構え直す。敵も数歩バックステップをするとすぐに構える。今度はこっちから攻めようと走り出す。そして間合いに入った瞬間、思いっきり振り下ろす

≪ザクッ！≫

　何かを刺す感触と音がする。一瞬、俺は人を刺したんだと認識し、吐き気がした。しかし、すぐにその認識を改める。目の前にあるのは土だけ。そして土には俺の刀が刺さっている。突然、真隣で土の音がした。避けた。斬られる。敵を見る前にそう考え付き、前転するように前に飛び込む。その勢いで刀は地面から抜け、俺は1回転する。俺はすぐにさっきまでいた位置を確かめてみると、予想したとおりそこには刀が刺さっていた。アレなら、動かなければ真っ二つにされていただろう。思った以上にこの刀は切れ味がいいようだ。俺はもう一度構えた。向こうは好戦的な設定なので、こっちが動かなければあっちが動くはず。なら、斬られる前にさっきの敵のように避け、思いっきり振り下ろして斬る。俺はすぐ避けられるように

重心を移動させながら注意する。そして、予想通りに敵はこちらへかけて来る。そして残り数メートルの瞬間、敵は刀を振り上げることなどせず、そのまま間合いに入り、下から振り上げるように斬りかかる。俺は初めから避けて振り下ろす気でいたので自然と意識は刀を上げる方へいっており、咄嗟に行動したものの、腹の横に鋭い痛みが走った

「ぐっ……！」

これが斬られた時に痛みなんだと分かった。一応は刀で受け止めたものの、体勢に無理があったのか、敵の刃はお腹に当たっている。致命傷になりはしないが、今まで怪我などあまりしたことがないうえに、こんなところを斬られることなどなかった。お腹を切られるというのは予想以上に痛く、痛みで手に力がうまく入らない。それに、やはり１８０度ほど回した腕に無理があるのか、手首の骨も折れそうな感覚がある。敵はそれを分かっているのか、更に力を加えてくる。これ以上されれば本当に骨が折れるかもしれない。俺はそう思った瞬間、無意識に敵を蹴る。敵もそれを予想していなかったのか、避けることもできずに蹴られ、仰向けに倒れる。俺はすでに息が上がっており、敵が起き上がったときにようやく『起き上がる前に刀を刺せばよかった』と思った。敵の方はまだまだ体力があるのか、息１つ乱していない。少し好戦的なだけで、ここまで本人と差がでるものなのだろうか。それとも相手は機械だからか？俺はもう一度構える。そして、なるべく全ての場合を想定する。しかし、敵がゆっくり考えることなど許すはずもなく、すぐに敵はかけて来る。離れることを忘れていた俺は一瞬で間合いに入られ、首目掛けて飛んでくる切っ先を驚いて見ることしかできなかった

「がはっ……」

咽にありえないほどの痛みが来た。死ぬ。そう思えるほどの痛みだった。俺は倒れ込み血を吐く

「ごほっ！ごほっ！」

しかし、死ぬことはなく、すぐに痛みは引いていく。

「はぁっ！はぁっ！」
首に手を当ててみる。手に血はつかない。けれど、俺の体のすぐ下には血に染まった草が大量にあった。乱れた息のまま前を見る。目の前には背を向け離れていく自分がいた。そして俺と一定の距離を取ったかと思うとこちらに向き直り、刀を構えた。おそらく、俺は戦闘不能と判断し初期位置……というより、設定距離まで離れたのだろう。俺は立ち上がり、刀を構える。流石にバーチャルの世界。俺が瀕死と判断するやいなやあがっていた息もすぐに回復し、元の万全の状態になった。そして万全になったと自分でも分かった瞬間、敵はかけて来る

作戦

結局、俺は一度も勝てなかった。合計で何回殺されたか分からない。覚えてるだけでも心臓を１８回、首を６回、脳を３回刺された気がする。そのたびに死にそうな感覚を味わった。もう夜は遅く、もう数時間で夜明けという時間だった。しかし、別にこの船にルールなどない。食事は機械で作るので食べたいときに食べられる。働く必要はない。寝室は４人１部屋だけど、自分のベットがあるので寝たいときに寝ればいい。だからこの時間まで練習してても問題はない。この後はぐっすり眠って、起きたらもう一度やろう。この時間までやったかいがあるのか、少しだけ分かったことがある。当然のことながら、バーチャルの世界だろうとなんだろうが、俺は斬ることに躊躇いがあるのだ。もちろん、それは普通のことだけど、今はそれが邪魔なのだ。実践では本当に人の命を奪わなければならない。そうしなければ自分の命を奪われる。同室の３人。あの３人はおそらく、殺すことに迷いなどないのだろう。

俺は寝てるであろう３人を起こさないようにゆっくりと部屋に入った。その瞬間――

≪ザクッ≫

首の真横に何かが刃が刺さった。その刃は未だに明るい部屋の端にあるソファーに座ったままのアランの手から伸びていて、首よりギリギリ１，２ｃｍ離れているだけだった。

「……」

俺はあまりの恐怖に動けず、何も言えずに黙っていた。入ると同時にこんなことになるなんて考えもしなかったし、全員寝ていると思ったのだ。アランは入ってきたのが俺だと分かると、どうやっているのか振り上げるように剣を上げると、その剣は一定間隔で折れていき、再び『Ｗ』の形になり、アランの背中に納まった。そして、今になって気づいたが攻撃こそしなかったものの、ヴィンセントは

銃をこちらへ向け、クリスも剣を両手に構えてこちらへ向けていた。
「なんやライか。てっきり、敵が侵入して来たかと思ったのに」
ヴィンセントはまるで、敵じゃなくて残念とでも言いたげにそう言い、腰に銃をしまうとベットに横になった。アランもいつの間にかソファーで腕組みをして同じ体勢に戻り、クリスも毛布を被り寝始めた。俺はしばらくその場を動けなかったが、疲れのせいか、動けるようになったあとはすぐにベットに入り、眠ってしまった
起きた時には昼過ぎだったと思う。時計などないので正確な時間は分からない。まあ、時間など分かったところで何にもならないけど。回りを見渡してみると相変わらずアランはソファーに座っていた。しかし、ヴィンセントとクリスはどこにもいない。俺はとりあえず風呂に入ろうと、着替えなど（そういうものはアリューさんが用意してくれた）を持って部屋を出た。浴場は広く、この船は動くホテルのように思えた。風呂から出て部屋に入ろうとノブに手をかけた瞬間、昨夜のことを思い出した。もしこのまま開けて入れば、また昨日と同じ目に合うかもしれない。俺は少し考え、ノブを回し、引いて開けると同時に自分もドアと一緒に移動した。俺はソォッと中を見てみると、特に剣を取り出した様子もなくアランはソファーに座っていて、とりあえず安心した。俺はそのまま中に入り、剣などを用意する。まだお腹は空いていないので何か食べる前に訓練をしようと思ったからだ。
それから向こうに着くまではずっと同じことを繰り返していた。おかげで多少は戦えるようになったものの、一度も……いや、一撃すら当てられないまま目的地についてしまった
セントラル・シティーは思ったより大きく、ファーディスト・アイランドとの印象の差が大きかった。まるで田んぼばかりの田舎から大都会へ来た感じ。建物は当然コンクリート製で、ビルのようなものまである。一見すれば、元の世界に戻ってきたような錯覚を覚える。俺が景色を見ている間にも同室だった3人はスタスタと歩いていく。結局、あれ以降も話したのはヴィンセントとだけで、アラ

ンともクリスとも話をしなかった。まあ、ヴィンセントとも話をしただけで、個人的なことなど何1つ分からなかった。
3人は町の中心に向かっているようで、大きな道を真っ直ぐ歩いていく。俺達以外に剣や銃を装備した人は回りに見当たらず、結構目立っていたが、3人はそんなことを気にした様子もなく、どんどん歩いていく。俺はその数歩後ろを歩く。数分歩くと目の前に大きな城が見えてきた。俺は思わず立ち止まる。見ただけで、ここで一番偉い人が住んでると分かる作り。ここが作戦の本拠地。俺はそう直感し、手に力が篭る。ここから始まる。これからどうなるかは分からないけど、成功したときには隣に夏海がいる。ただそれだけは分かっていた。
3人は止まることなく、いつの間にか扉を開けて入っていくのが見えた。俺は慌てて追いかけ、直前で閉まった扉を再び開け、中に入る。中は外見と同じように豪華で広かった。……ただ、中には誰もいなかった。これだけ大きな屋敷なのに、使用人らしき人が1人もいないのだ。3人はそれでも歩いていく。まるでどこへ行けばいいのか分かっているかのように。もしかしたら、この世界で生まれた人なら誰でも知ってることなのかもしれないが、俺は戸惑いながら3人に続く。3階まで上がり、ある部屋の前まで来た。その部屋は他の部屋とは違う雰囲気が漂っていた。3人は初めてそこで立ち止まると、アランは2回だけ部屋を叩き、扉を開けた。部屋の中はどこかの社長室のようで、机の向こうの椅子には男の人が座っていて、俺達の入室に驚いているようだった。
「君達は……？」
「ソフィア様奪還作戦に参加しに来たんや」
ヴィンセントがアランの前に出て、そう言った。男はその言葉を聞くと、どこか悲しそうな顔をしながら言った
「その作戦は……もうないんだ。」
一瞬、男がなんと言ったのか理解できなかった。奪還作戦が……もうない？

「どういうことや？」
後ろからだから分からないが、アランとクリスは全く動揺した様子はなかった。だが、ヴィンセントだけは違った。後ろの俺にすら分かるほどの殺気をヴィンセントは出し、男に聞いた。男はその殺気に怯えているのか、突然震えながら喋りだした
「あまりにも死者が多すぎて、中止になったんだ。だから悪いことは言わない。帰りなさい」
「船はあるのか？」
男の言葉に、今度はアランが口を出した。けど、船があるかどうかなど聞いてどうするんだ？……まさか自力で行く気なのか？男もすぐにそれに気づいたのか、必死で頭を横に振る
「市長さん。大人しく船を出してくれへんか？」
ヴィンセントまで自力で行く気なのか、殺気を出しながら市長と呼ばれた男の方へ詰め寄る。そこまでして、なんでヴィンセントとアランはソフィア様のところまで行きたいのだろうか？
「……だが、これ以上死者を出すわけには……」
「安心せい。わいらはただ、自分の意思でセシルムへ行くんや。作戦は関係ない。」
「……2人はどうしてそんなにもソフィア様のところに行きたいんだ？」
我慢できず、とうとう聞いた。もちろん、答えてくれるとは思っていなかったけれど、そこまでして夏海に会いたい理由が分からなかった。
「……そういうライはなんでソフィア様に会いたいんや？」
予想したとおり、ヴィンセントは振り返り、そう聞き返した。けれど、俺は答えられない。答えても得はなく、損しかない。
「答えられない」
俺はヴィンセントを見つめたままそう返した。しばらくヴィンセントと睨み合う形になったが、とうとうヴィンセントはどうでもよくなったのか、再び市長の方に向き直り、船のことを頼みだした。

海の魔物

数分後、ついに市長は折れ、４人が乗れる大きさの船を貸してくれることになった。その船は大型とは言わないものの、小型よりも大き目で、４人が横になっても十分な大きさだが、なんと帆船だった。俺は心配になったものの、ヴィンセントは「まあ、コンパスと地図があるんやから、なんとか辿り付けるやろ」と楽観的だった。アランもクリスも何も言うことなく乗り込み、心配なまま出港してしまった。作戦があった頃にはセシルムまで3日掛かったらしい。市長の優しさゆえか、食料は7日分積んでくれていて、多少迷っても食料は持つだろう。……ただ問題は――

「……」

「……」

「……（ニヤニヤ）」

相変わらず黙っている2人と、俺を見てニヤニヤするヴィンセント。まあ、ヴィンセントはまた俺が不安になっているのを楽しんでいるだけかもしれないけれど、アランは船の端に座って黙ってるし、クリスは剣の手入れをすることもなく、アランとは反対側の端で横になっている。なので、自然と俺とヴィンセントは中心付近に座ることとなった。十分ほど過ぎた頃、不意にヴィンセントは口を開いた

「なぁ、ライ。あんさんはどこから来たんや？」

「え？」

突然の質問だったので、理解できなかった。少し時間が経っても、未だに理解できない。どこから来た？俺は質問の意味が分からず、ヴィンセントを見つめ返すことになった

「あんさん、ファーディスト・アイランドから乗ったようやけど、ファーディストの出身やないやろ？」

確かにファーディスト・アイランドの出身ではない。……けど、なんでそんな質問を今するんだ？

「……なんでそんなことを聞くんだ？」
俺は思ったままのことを口にした
「ライ。あんさんはどうにもおかしいんや。ファーディストはその名の通り『最果て』。せやけど、例えファーディスト出身でも、セントラルを見たことがない人なんておるわけないんや。なのに、あんさんはセントラルに来たとき驚いとった。……あんさん、ほんまは何者や？」
ヴィンセントの目つきが急に鋭くなった。まるで、突然目の前の俺が敵になったかのように。どうする？答えるべきか？けど、今それを言って信じてもらえるのか？
「……話さないといけないのか？」
結局、俺はヴィンセントの顔色を窺う質問をした。これで銃を向けられるようなことがあれば喋らなければならないだろう。逆に、諦めてくれるなら助かる。
「いや、話さんでええよ」
俺はヴィンセントの言葉にホッとし、クリスと同じように寝てしまおうかと横になろうとした瞬間、ヴィンセントの「それに、お客さんを待たしたらあかんしな」という言葉で停止してしまった
「……お客？」
なんのことだろう？クリスは寝てるし、アランは黙って座ってるだけ。他に誰もいない。当然だ。ここはもう海の上。町すら見えず、人が隠れれる場所もない
「もうじき分かる」
しかし、ヴィンセントは笑うだけで、何も答えてくれない。……けど。数分後、確かにお客が誰なのか分かった。
突然、なんの前触れもなく海が揺れだした。いや、船が揺れだした
「うわっ！」
俺は突然のことに戸惑いながら、船にしがみつく
「お客さんの到着や」
ヴィンセントは未だに笑いながら、銃を両手に持つ。いつの間に

か起きたクリスも剣を両手に握り、アランも背中の剣を真っ直ぐに伸ばし、辺りを見渡す。もしかして敵が来たのか？こんな海の真ん中で？そう思ったものの、辺りには何もない。一面、揺れる海だけ。

「何が起きてるんだ！？」

俺は全く納まらない揺れに翻弄されながら、ヴィンセントへ聞いた。だが、聞くまでもなく、その正体が分かった。確かに敵はいたのだ。海面という死角の中に……。

それは巨大な蛇のような怪物……リバイアサンだった。まだまだ遠くにいるはずなのに、それでもその巨大さが分かるほどの大きさ。そして、リバイアサンは縦にうねるように移動しながら、頭を出したり沈めたりし、この船の周りを泳ぎだした

「羽のあるトカゲが出るってのは聞いたことあるけど、こないな大きな蛇は聞いたことがないな」

ヴィンセントは驚いているようなことを口にしながらも、銃をリバイアサンに向ける。そして、リバイアサンが頭を出した瞬間に、正確に撃った。ヴィンセントの弾は船で見たように正確にリバイアサンの目に当たり、悲鳴を上げた。しかし、数秒その場で頭を振ったかと思うと、急にこちらへ頭を向け、突進してきた

「こりゃやばいな」

ヴィンセントは焦ったようにそう言い、再び銃を構える。けど、俺でも分かる。いくら銃を撃っても止めることは絶対にできない。どうすればいい

「ヴィンセント、もう片方の目を撃って」

「え？」

突然、横から声が飛んできた。声は小さく、空耳かもと思える声だったが、すぐにクリスが言ったのだと分かった。

「了解」

ヴィンセントも聞こえたのか、すぐに銃をリバイアサンの目に向ける。クリスはその間にも帆を畳みながら、アランにも指示を出す

「アラン、あの怪物の体勢を崩すから、峰で思いっきり怪物を叩い

て」
「分かった」
クリスは2人に指示を出すと、自分は左手の剣をしまい、右手に剣を握り、振りかぶれるように姿勢を変える。まるでバットを振るように
「ちょ、ちょっと待って！何をする気なんだ！？」
アランもヴィンセントもまるで何をするのか理解しているように行動しているが、俺には全く理解ができない
「黙ってて。今まで以上に揺れるから貴方は船にしがみ付いてなさい」
そう言われ、再び反論しようとしたが、次の瞬間には行動は始まっていた。まずヴィンセントがリバイアサンに向かって銃を撃った。その弾は当然のように目に当たり、リバイアサンは暴れだした。しかし、こちらへ向かってきていたせいでリバイアサンは止まることなくこちらへ向かってきていて、このままではやはりぶつかってしまう。しかし、ヴィンセントが弾を撃った瞬間にはクリスの攻撃が始まっていた。クリスが剣を思いっきり振った瞬間、俺の剣より短い剣が伸びた。……いや、正確には伸びたのではないのかもしれない。クリスが剣を振った瞬間≪ジャララララ≫という、鎖の音が響き、リバイアサンに向かって剣が一直線に伸びていく。……しかし、その剣先はリバイアサンには当たらなかった。ここからでも明らかに外れたことが分かる程だった。もうリバイアサンは目の前まで迫り、俺は死ぬんだと思った。……けれど、クリスは相変わらず無表情に……剣を更に振りぬいた。すると外れたはずの剣先はリバイアサンにぶつかり、わずかに軌道を変えた。しかし、まだまだリバイアサンの進行方向にこの船があることは間違いない。俺は咄嗟にアランを見た。最後、クリスはアランに峰で思いっきり叩くよう言った。……それはもしかして、斬るのではなく、その力で船を無理矢理動かそうとしているんじゃないか？そう頭を過ぎったときには反射的に船にしがみ付き、振動に耐えられるよう構えた。いつの

間にかヴィンセントもクリスも揺れに備えていて、アランだけが立ち、迫ってくるリバイアサンの方を見つめていた。そしてアランは手に持った長剣をクリスのように両手で構え、バットを振るように構える。……そしてついにリバイアサンが目前に迫った瞬間――

「ふんっ！」

目にも留まらぬほどのスピードで剣をリバイアサンに叩き付けた。いや、正確には何をしたのかは分からなかった。アランが振ったと思った瞬間、体が吹き飛びそうな感覚と共に、景色が飛んだ。俺は叫び声を上げることもできず、水が跳ねる≪バシャッ！バシャッ！≫という音を聞いていた。しばらくすると船はドンドンゆっくりになり、ついには止まった。恐る恐る頭を上げ、さっきまでいた方向へ頭を向けると、まだ海に横たわる巨大な物体が見えていた

「怪物が起きる前に行こか」

さっきまであんなことがあったにも関わらず、ヴィンセントはすでに笑っている顔に戻り、帆を下げだした。俺はそんなヴィンセントを少し羨ましく思いながらも、他の2人の様子を確認して驚いた。他の2人はいつも通り無表情で、どこも疲れた様子がないのだ。まるでそれが日常でもあるかのように、クリスは再び横になり、アランは刃こぼれがないか確かめているのか、座って剣を眺めていた

島

数時間後。船は大きな島に着いた。その島は森に覆われていて、中がどうなっているのかが全く分からなかった。大きさも『とにかく大きい』としか言いようのないほど大きく、一度森に入れば地図やコンパス無しでは帰ってこられないように思えた。

船が島の浜辺に着くと3人に続いて船を降りた。船を降りて数歩歩けば森の中。そんな危険な場所。本当にこんなところに夏海がいるのだろうか？一瞬、このまま帰った方がいいのかもしれないと思ったが、すぐに思い直した。

「……さて」

ヴィンセントは一番に船を降り、辺りをグルッと見渡すと、振り返り言った

「ここまで来たはええものの、これはもう集団での奪還作戦やないんや。わいも含めて全員、ここへ来たのは訳ありみたいやからな。どうや？ここからは別行動にせんか？」

突然の提案だった。

「ヴィンセント。そうは言っても、中に何があるか分からな――」

「そうだな」

「いいわよ」

しかし、俺の言葉は遮られ、アランとクリスもその提案に乗った。

「……じゃあ、そういうことや、ライ。ここからは単独行動や。幸い、地図もコンパスも4人分あるんや」

ヴィンセントはコンパスと地図を俺たちに1つずつ放り投げた。

「じゃあ、わいは先行くで」

ヴィンセントは言うだけ言うと、止める間もなく、サッサと歩いて行ってしまった。アランとクリスはヴィンセントを1度見ただけで、3人とも違う方向へ歩き出した。俺はどうしたらいいかも分からず、少しの間立ち尽くしていたが、ようやく森に入る決心をし、

とりあえず森の中心を目指して歩き出した。
森の中は薄暗く、まるで樹海だった。立っている木が普通の木ならここまで薄暗くはならないだろうが、立っている木の1本1本が大樹であり、根だけでも大人ほどの太さの2倍はゆうにあった。俺はそれを1つ1つ越えながら中心を目指す。
……どれだけ歩いただろうか？時計など持っていないし、木のせいで太陽も見えない。できればこのまま何事もなく夏海の所へ着きたい、そう思った瞬間――
≪パキッ！≫
近くで枝が折れる音がした。咄嗟に俺は音のした方へ体を向けると、そこにはなんとライオンがいた。
「……マジかよ……」
リバイアサンがいた以上、森にライオンが出てもおかしくなはい。むしろ、至って普通に思える。……が、だからといって怖くないわけではない。勝てるわけではない。いや、正確には怖いが、勝てるかどうかは不明だ。勝てるかもしれない。船での修行の際、何度か戦ったことはある。……が、勝てたのは数回ほど。しかも、無傷での勝利など1度も無い。軽くて骨折レベルの怪我は負った。
……けど、逃げられる状況ではないことは分かりきっている。俺は腰の刀を抜いた。本物の刀を使うのは初めてだが、シミュレートでは何度も使った刀。俺は刀を構え、襲ってくるのを待つ。今の俺の身体能力では、こちらから攻めてもカウンターに合う確立が高いことは分かっていた。だから、むしろ敵に襲わせ、それを回避したうえでこちらがカウンターを当てる方が何倍もいい。
ライオンは警戒しているのか、俺とは一定の距離を開き、ゆっくりと俺を中心に円状に動く。俺はいつでも動けるように片足を軸に、ライオンに体を向ける。
ただ円を描くだけで、半円ほどライオンが動いた瞬間――
≪ガォ～～～ッ！≫
ライオンが飛び掛ってきた。俺はさっきまでと同じように片足を軸

に体を捻り、ライオンの軌道からズレると同時に、ライオンの体を横に斬るように刀を振るう
≪ガォ〜〜〜ッ！≫
ライオンは避けられるとは思っていなかったのか、体を斬られバランスを失い、地面に顔から激突し、暴れまわる。俺は再び距離を取り、構える。
未だに暴れまわっているライオンを見ていくらか余裕ができたのか、手が振るえていないことに気がついた。刀には血が付いている。目の前には一撃で俺を殺せる動物がいる。それだけでも怖くて動けなかったり、動物を斬った衝撃で震えてもおかしくないのに、俺の体は全く震えていなかった。シミュレーションでは、確かに斬れば血はでた。もしかしたらそのおかげなのかもしれないが、なんとなく……なんとなく、自分が冷酷な人間になっている気がして悲しかった。
そして、そんなことを考えていたせいか、いつの間にかライオンが静かになっていることに気がつかなかった。気がついたときにはライオンの姿は消え、すぐに辺りを見渡したときには、後ろから飛び掛られる直前だった。俺は慣れた動作など気にする余裕もなく、反射だけでライオンの攻撃を回避しようと体を捻った……だが
≪タッ≫
ライオンは俺の目の前で着地したかと思うと、その場で方向を変え、腹に噛み付いた
「あぁぁぁぁぁぁ！」
噛まれると同時に押し倒され、背中の衝撃と腹の痛みのせいで口から叫び声がでた。一瞬、この叫びのおかげで3人の誰かが助けに来てくれるという希望も持ったが、すぐにそれを掻き消す。例え助けに来たとしても、それまでに俺は肉片になっているだろう。俺はなんとか手放さずに済んでいた刀を握り、思いっきりライオンの顔へ横から刺した。
≪ガォ〜〜〜ッ！≫

刺した瞬間、ライオンは今まで以上の叫びを上げたかと思うと、力尽きたように倒れこんできた。
「ッ！ハァッ！ハァッ！ハァッ！」
叫び声のおかげで腹からキバは抜けたが、出血が酷かった。このままだと確実に死ぬ。素人目にも分かるほどの血。意識も朦朧としてきた。死の直前の走馬灯なのか、ここまでのことや夏海のことが頭を過ぎった。

そして最後に体が認識したのは……影だった

森

最後に見た影は朦朧とした意識が生み出した幻覚なのか、それとも本物の影だったのかは分からない。……けど、気がついたときには俺は木を背に座らされ、腹の傷は跡形もなく消えていた。俺は立ち上がると、辺りを見渡してみる。近くには俺が殺したと思われるライオンの死体が1つだけあったが、腰に戻っていた刀を鞘から抜くと、刀には血の跡は残っていなかった。一体、何が起きたのか分からない。体にも刀にも何1つなんの後も無い。これじゃあ、俺がライオンを殺したのだって疑わしい。……けど、現にライオンの死体はある。近寄ってみても寝ているとは思えないほどだった。ライオンの周りには黒くなった、血と思われる塊も大量にある。俺はこれ以上ここにいても意味がないと判断し、歩き出した。腹を噛まれたわりには体の調子はよく、余計にさっきまでのことが嘘のように思えた。

歩き出して数十分、視線の奥に大きな塊が見えた。遠くから見れば岩のようにも見えたが、色は茶色で明らかに岩ではない。俺はなるべく音をたてないようにゆっくり近寄ると、次第にそれが何なのかが分かってきた。それはクマだった。ただ、大きすぎるクマ。さっきのライオンなど、まだ実在するだけ怖さは小さかったのかもしれない。……けど、このクマは大きすぎる。6メートルほどあろうその巨大なクマが横になっていた。俺は刀を構えることも忘れ、そのクマを眺める。数秒後、俺はこの状況の不味さに気がつき、すぐに音をたてないようにクマから離れる。今は寝ているようだが、起きたらヤバイ。俺はゆっくり離れ、迂回する形でクマをやり過ごす。……が、クマの様子がおかしかった。さっきから、全く動かないのだ。俺はすぐ逃げられるように構えながらも、ソロソロと近寄る。そして、近くに来てようやくそのわけが分かった。このクマは死んでいる。口から血を吐き、片方の目は潰されていた。ザッと見ても

外傷らしい外傷はなく、このクマを殺った人を思うとゾッとした。おそらく、残り3人のうちの誰かなのだろう。動物同士の殺し合いでこんな殺し方はしないだろう。いや、できないだろう。……けど、明らかに普通の人間のできる戦闘でもない。改めて、あの3人は異常者だと思った。俺はクマから離れ、再び島の中心へ歩き出した。それからも何度も死体があった。それは、誰か少なくとも1人はここを通っているということだ。歩けば歩くほど、死体と死体の距離が狭くなっていく。

そして数時間ほど、休みを入れながら歩いていると、突然、銃声と雄たけびのようなものが聞こえた。俺はすぐに刀を抜くと、音のした方へ走り出した。数秒後――

≪バキバキバキ！≫

木が倒れてきた。俺は咄嗟に後ろに飛び、その木を避ける。幸い倒れてきた木は後ろに飛ばなくても当たらない軌道だったので平気だったが、倒れた際に起きる風に吹き飛ばされそうになる。俺はそれをなんとか堪えると、目を開ける。すると、そこにはなんと大蛇がいた。それも、さっきの巨大なクマの2、3倍はあろうかというほどの巨大さだった。……が、突然、蛇は横に倒れる。俺はそれを呆然と見ているしかなかった。……しかし、蛇が倒れると、誰かが歩く音がした。俺は放心状態から覚め、その足跡の方へ走った。すると、そこには見知った顔の人がいた。

「ヴィンセント！」

「……なんや、ライかいな」

俺が声をかけるとヴィンセントは一瞬、人でも殺しそうな目をこちらへ顔を向けたが、相手が俺だと分かると途端に今までのニヤニヤ顔に戻り、そう言った。

「生きとったんやな、ライ」

「ああ」

ヴィンセントはやはりニヤニヤしたままで、俺が生きていることが嬉しいのか、悲しいのか、それとももっと別のことを考えている

のか分からなかった
「他の2人は？」
「さぁなぁ。ま、こういうのもなんやけど、あんさんが生きとんなら生きとるやろ」
確かにそうだろう。ここまでいくつも死体があったが、それを全部ヴィンセントが殺ったなら、他の2人も余裕で生きているだろう。
「……さて。ここで会ったのも何かの縁やろうし、どうせ目指す方向は一緒なんやろ？一緒に行こか」
それは俺にとっては願ってもない提案だったので、すぐに頷いた。俺達は無言で歩いた。ヴィンセントの足取りは速く、まるでここがデコボコな森の中ではなく、平地とさえ思えるほど軽かった。俺はそれに一生懸命付いていくと、数分もたたないうちに、森の奥の方から光が漏れていた。
「……どうやら、森は終わりみたいやな」
ヴィンセントはそう呟いた。その光に近づくにつれ、俺にもその光がなんなのかが分かってきた。それは太陽の光であり、ヴィンセントの言ったように森の終わりだった。森を抜けると、そこの先には予想外の光景が待っていた。そこには昔のような藁で作った家がいくつもあった。俺は予想外の光景に呆然としていたが、ヴィンセントは驚くことも警戒することもなく、歩き出す。民家は密集しているとは言えないが、そこそこ民家と民家の距離は近く、それらの多くの民家を囲むように、大きな鉄の柵が立てられていた。まるでバリケードのように。その柵には入り口のように開くドアがあったが、そこには鍵など付いておらず、簡単に入れた。……が、鍵を開けて中に入った瞬間、ヴィンセントは突然、腰から銃を抜くと1つの民家に向けて撃った
≪ダンッ！≫
銃声は1つ。だけど、弾は2丁から放たれた。ヴィンセントからはニヤニヤ顔が消え、さっきのような殺意を持った目をし、撃ってもまだ銃を構えたまま、静止していた。正直、俺には何があったの

か分からなかった。……けど、それはすぐに分かった
「慌てないでください」
若い男性の声とともに、ヴィンセントが撃った民家の中から男が出てきた。身長は低く、遠めからでも分かるほどの童顔。そして、その顔は撃たれたにも関わらずニコニコしており、『やさ男』という言葉がそのまま当てはまるような男だった。ただ1点……背中に長い棒のような物を背負っていなければ。
男はゆっくり歩きながら俺達の方へ近寄ってくる。その間にもヴィンセントは銃を向けたままにし、俺も自然と刀を抜く。しかし、男は気にした様子もなく近づいてくる。男が近づくにつれ、背負っているものがなんなのかが分かってきた。それはライフルだった。……ただ、ライフルの先には刃が付いていた。ガンブレードという、剣としても銃としても使える武器がゲームではあるけど、そのライフル版。
「ようこそ。そして初めまして。僕の名前はピコルと言います」
ピコルと名乗った男は近くまで来ると立ち止まり、そう名乗った。距離はおそらく10メートルほど。俺はいつでも行動できるようによりいっそう、警戒する
「そんなにも警戒しないでください」
しかし、やはり素人の俺の行動などお見通しなのか、ピコルは優しくそう言った。けど、その言葉から『警戒しても無駄』という感じのことは感じ取れず、むしろ『今は何もしない』とさえ言っているように聞こえた。
「……警戒するなって言っても、お前は敵なんだろ？」
「はい、そうです」
ピコルは躊躇うことなく、そして、表情を崩さないまま、そう言った。
「なら、警戒して当然だろ？」
「そうですね。これは失礼しました。しかし、僕達には僕達のルールがあります。なので、僕はまだ貴方達を攻撃するわけにはいかな

いのです」
「ルール……やと……？」
ずっと警戒したままだったヴィンセントが聞き返すほど、意外な言葉だった。それは当然だろう。攻撃するのにルールなど必要ない。だから、そんな甘いことを言うとは思わなかったのだろう
「ルールってのはどういうことや」
「質問に関しましては残りのクリス様、アラン様の死亡の報せ、または到着された際に説明致します。なので、今はごゆっくりお寛ぎください」
ピコルは未だにニコニコしたまま、俺達に近くにある木製の椅子に座ることを勧めた。俺はどうしたらいいのか迷ったが、ヴィンセントが舌打ちをしながらも椅子に腰をかけたのを見ると、俺も椅子に座った。ピコルはその行動に満足したのか、こちらを見るのを止め、俺達の入ってきた入り口を見つめ始めた。

ピコル

いくらかたった頃、足音が聞こえてきた。足音は2つあり、入り口からはアランとクリスが現れた。2人は俺とヴィンセントを一瞬見ると、ピコルへ顔を向けた

「ようこそ。そして初めまして。僕の名前はピコルと言います」

俺とヴィンセントは立ち上がり、2人と合流するとピコルは再び自己紹介した。

「……で、さっそくルールってのを聞かせてもらおうか」

『ルール？』

ヴィンセントは合流するとすぐにそう切り出した。アランとクリスは全く意味が分からず、無表情ながらもそう聞いた。なので俺は軽くさっきのことを話した。説明が終わると、ピコルは話し出した

「先ほども言いましたように、これは僕達にとってゲームなんです」

「ゲーム？」

「そう。ゲームです。簡単に言えばいくつかの試練を用意し、ゴール……つまり貴方達がソフィアと呼ぶ少女の元へ到達できるかどうかというゲームです」

「その試練ってのはなんなんや？それに景品はあるんかいな」

「試練は全部で5つあります。ここまで来るのが第1の試練。今回は僕ですが、準フロアマスターを倒すのが第2の試練。この先にある城の前にいるフロアマスターを倒すのが第3の試練。城の玉座の間へ行くのが第4の試練。そして、玉座の間にいるマスターを倒すのが第5の試練です。」

「……本当にゲームみたいだな」

「けど、それは事実なのかしら」

ピコルの説明に、納得がいっていないようにクリスが言う

「どういうことですか？」

「なぜ、敵である私達にそんなことを説明するのかしら。そちらに

はなんのメリットもないでしょう？」
「いえ、メリットはあります。これは景品に関係してきます。これは試練であり、テストでもあるのです」
「テスト？」
「ええ。このテスト、クリアした者にはクリアしたレベルの称号が与えられるのです」
「どういうことだ？」
「……つまり、第２の試練をクリアした者は準フロアマスターの称号を貰える……ということか」
　俺の疑問に答えるように、アランが言う
「そういうことです」
「ちょっと待ちぃや。つまり、勝てばあんさんらの仲間にならなあかんのか？」
「いえ。必ずしもそうではありません。仲間にならない方法は２つあります。１つ目は試練から逃げ出すこと。ただし、この方法を取られた際には常に次の試練の担当者が地の果てまで追います。その担当者が死ねば次の試練の担当者が追います」
「まるで犯罪者やな。……２つ目はなんや？」
「マスターを倒すことです。僕達はマスターには逆らえません。つまり、マスターになりさえすれば僕達を解散させることも、自害させることも可能です」
「そうか。じゃあ、ついでにもう１つ聞くが、もし死んだらどうなるんや？」
「この森に住む動物の餌になります」
「そうか……」
　ヴィンセントの質問が終わると沈黙が流れた。それはもう誰も、質問などないことを表していた。……瞬間、戦いは始まった
≪ダンッ！≫
　ヴィンセントの銃声を合図に、クリスが右にアランが左に走った。俺は戦いの始まりを感じていたとはいえ、あまりにも突然過ぎる始

まりに戸惑い、全く動けなかった。しかし、ピコルはそんなことには動じず、体を逸らしながら、背中のライフルを構える。そして、俺は『ヤバイ』と直感し、右へ飛んだ

≪ドン！≫

その瞬間、ライフルから撃たれたとは思えないほどの音と共に、俺の頭のあった位置の直線状の民家に、拳１つ分ほどの穴が開いていた。

「……どういう原理や？それは……」

ヴィンセントも不思議に思ったのか、そう言った。民家に開いた穴と銃口の大きさ。その２つは明らかに多きさが違う。開いた穴は、銃口の大きさの数１０倍はある。

「簡単ですよ。僕の撃つ弾は空気中で鉄を吸収するだけです」

そんな弾を作ることができるのか？……いや、この世界で常識を考えるな。例えなんであろうと、相手の撃つ弾は拳ほどの大きさ。それは事実なんだから。俺はようやく刀を抜き、構える。アランとクリスの姿は見えないが、おそらくどこかで攻撃の機会を窺っているのだろう。それに対してヴィンセントは隠れることも銃を構えることもせず、ただすぐ動けるように構えているだけだ。俺は斬りかかるかチャンスを待つか判断に迷った。……が、すぐにピコルが動いた。

「ドン！ドン！」

どういう腕をしているのか、ピコルはまるで普通の銃を両手で扱うかのように、片手で軽々と連続で２発、右の小屋へ向けて撃った。そしてピコルが撃ったと同時に小屋から何かが伸びてきた。しかし、それはピコルに当たることなく、ピコルの撃った弾が当たったことにより軌道が逸れる。ピコルの弾が弾いた物はクリスの伸びた剣のようで、小屋が半壊した煙が収まるとそこにはクリスがいた。

「……凄い射撃の腕ね。見えてもいないのに軌道をうまくずらすなんて……」

「お褒め頂ありがとうございます」

「……」
「……」
≪ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！≫
突然、銃声が聞こえた。２人に見惚れていたが、ピコルは今無防備だったのだ。ヴィンセントはいつの間にかクリスの方に移動し、わざと気づかれるように何発も弾を撃っている。そして、当然のようにピコルはその何発の弾をも銃で弾く。俺はヴィンセントが何をしたいのかが分からなかった。数秒後、≪カチカチ≫という、弾切れの音がした。それと同時に、まるで弾切れがいつなのか分かっていたかのようにピコルは銃の持ち方を変え、ヴィンセントに銃口を向ける
「危ない！」
俺は動けないまま、大声を上げるしかできなかった。……が
≪ビュンッ！≫
何かが風を斬る音がした。瞬間、ピコルは危機を察知したのか、腕を無理矢理動かし、ガードに入る。しかし、無理矢理に構えすぎたせいなのか、ガードした方向から突然現れた長剣を防ぐことはできたものの、堪えることなどできず、当たった瞬間にピコルの体は吹き飛んだ。ピコルの体はまるでゲームのように吹き飛び、民家をいくつも貫通した。しかし、それでもまだ攻撃は終わっていなかった。いつの間にマガジンを交換したのか、ヴィンセントはピコルの飛んでいった方向へ銃を乱射する
≪ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！≫
その銃声は再び弾切れの音がするまで続き、弾が切れた時には煙でピコルは勿論、いくつかの民家さえ見えなくなっていた。
「やった……のか？」
俺はヴィンセント達とに近づき、確認した
「……いや、生きとるやろな」
「そうね」

ヴィンセントの言葉にクリスが同意する。
「ま、骨の1本ぐらいはアランの攻撃でやったやろうけど、わいの銃弾は意味無かったやろな」
ヴィンセントは特に残念がるでもなくそう言う。……けど、普通の人間ならあんな状態で撃たれれば確実に死ぬ。いや、万全の状態であっても死ぬだろう。……本当に、あのピコルもだが、この3人は人間離れしている。俺が無力感に俯いた瞬間――
≪ドン！≫
……何かが頬を掠めた。すぐにはそれがなんなのか分からなかった。が、すぐに頬に鈍い痛みが走る。手の甲で拭いてみると、血が流れていた
「やはり左手では精度が低いですね」
血に驚いていると、民家からピコルがそう言いながら歩いて出てきた。しかし、その右手はありえないほど外側へ回っており、左手に持った銃口からは煙が出ている。それを見ただけで、さっき頬を掠めたのはピコルの銃弾なのだと分かった。
「……どうやら、貴方達を甘く見ていたようですね」
「……降参でもするのか？」
「いえ」
未だにニコニコ笑っているピコルはアランの言葉を否定する。……そして、急に『ニタァ』と気持ち悪く口が変わったかと思うと
「死ぬ前に1人でも多く殺せとマスターが仰いましたので、手始めにそちらの剣を背負った少年から」
そう言うと同時に、ピコルの銃の乱射が始まった。俺はすぐに走り出した。当たらない自信などない。……けど、あの場にいたら確実に死ぬ。俺は思いっきり走った。なんとなくだが、3人の誰かが守ってくれることなんてないと思う。俺が狙われているなら、俺を囮にしてピコルを攻撃するだろう。そして案の定、3人は散らばり、ピコルの左右と後方へ飛び、攻撃を開始する。しかし、ピコルはピコルで3人の攻撃を回避しながらもこちらへ弾を撃ち込んでくる。

さっきのように左手のせいなのか、走り回っているだけでピコルの弾は俺には全く当たらない。俺は銃口を見ながら回避し続ける。
……数分、そんな状況が続いた。未だに誰も攻撃を当てられない。俺は狙われている緊張感から疲弊し、足も覚束なくなっていた。そしてそのせいなのか、『しまった』と思ったときには足が絡まった。
「くっ！」
「死になさい！」
足が絡まった瞬間、まだ体がほんの少ししか傾いていない状況でピコルの声と銃声が聞こえた。顔は自然とピコルの銃の方へ向いた。辺りはまるでスローモーションのようにゆっくり移動し、俺の目はピコルと銃とヴィンセントとクリスとアラン……そして俺に迫ってくる弾丸を捕らえた。だからこそ分かった。この弾は俺に当たる。俺は諦めて目を閉じた。その動作でさえゆっくりと感じ、次第に迫ってくる弾丸を視界から無くした
「斬るんや！」
閉じた瞬間、ヴィンセントの叫び声がした。俺はハッと目を開けた。視界には目前まで迫った弾丸とこちらへ顔を向け、必死の様子で口を開けたヴィンセントが映った。体は既に半分ほど傾いている。……が、まだ刀は手放していない。足は空中にあるが、前に出ている。俺は咄嗟に、地面を蹴り、右手を無造作に振った
≪ギンッ！≫
刀に振動が伝わる。それと同時に、足を地面に付けたまま、上半身だけが横回転する。と同時に、足が地面から離れ、体が横回転する
「ぐっ！」
俺はそのまま地面に倒れこんだ。体が痛む。右手が痛い。咄嗟にヴィンセントの言うとおりに弾に刀を当てれたようだが、ピコルの弾は拳ほどの大きさ。俺の右手はその振動に堪えられなかった。幸いなのは弾の軌道を逸らせ、外傷はなかったことだ。しかし、俺は起き上がることができなかった。どれだけの力で地面に落ちたのかは知らない。……だが、刀が弾に当たった瞬間、確かに地面に落ち

るスピードは上がった。その痛みで俺は起き上がれない。だが、起き上がらなければならない。次に撃たれれば死ぬ。……が、いつまでたっても銃声は聞こえてこない。俺は痛みで瞑っていた目を開けた。すると、目の前にはヴィンセントがいた

「ほんまに斬れるとは思わんかったで」

ヴィンセントはニヤニヤ顔でそう言った

「ピコル……は……？」

「ああ。アイツならあんさんを撃ったと同時に油断したんやろ。クリスの剣が切り裂きよった」

よかった。結局、俺はなんの役にも立てなかったが、死ぬことなく第2試験はクリアすることができたのだ。俺はそのまま、意識を失った。

アリサと夏海

目が覚めたとき、目の前は金色だった。……いや、正確には鈍い金色。どうやら、ここはピコルと戦った場所にあった小屋の1つのようだ。俺はその中にあったらしいベットの上で横になっていた。起き上がってみると体は痛くなくなっていた。外へ出てみると真っ暗で、夜だということが分かった。

「起きたんか」

「ヴィンセント」

外へ出るとヴィンセントが話しかけてきた。辺りにアランとクリスの姿はなく、ヴィンセントだけだった

「アランとクリスは？」

「2人とも寝取る」

「ヴィンセントはどうしたんだ？」

「どうもせんよ。眠れんから外出てただけや」

「そうか……。それで、出発はいつなんだ？」

「さあな～」

「さあなって……」

「全員が目を覚まして、準備が整ったらやろ。せやからあんさんも寝てた方がええで」

「……そうだな」

「じゃあな」

ヴィンセントはそう言うと、自分の寝ているらしい小屋へ向かおうとした

「ヴィンセント」

「……なんや？」

俺が声をかけると、ヴィンセントは立ち止まり、こっちを見た

「なんで……あの時『斬れ』って叫んでくれたんだ？正直、そんなこと言うぐらいならピコルに視線を向けたまま乱射した方がよかっ

たんじゃないか？」
「……」
俺の言葉にヴィンセントは少しの間口を閉じていたが、ようやく口を開けた
「わいにはな、弟がおったんや」
「弟？」
「そうや。自分で言うのもなんやけど、わいは強い。けど、弟は弱くてな。それでも、弟がわいは好きやったんや。わいの住んでた所は殺しなんて日常やったからな。親もおらず、こいつだけはわいが守らなあかん思ってたんや。……せやけど、ある日、わいのちょっとしたミスで弟が死んでしもうたんや。それも目の前でや」
「……そうなのか……」
そのときの状況なんて分からない。……が、例えば……例えば夏海が俺の目の前で殺されたら？それも俺のミスで。そう考えるだけで、ヴィンセントの後悔はよく分かる
「あんさんはその弟に似ててな。弱いところもやけど、刀を使うところとかな。アイツ、わいが銃を使うもんやから、自分は刀だって言ってな」
「……」
俺は何も言えなかった。いつも通り、ヴィンセントはニヤニヤしながら言っていたが、その顔は少し悲しそうだった。
「ま、そういうわけや。ただ弟に似てたからや。じゃあな。次からは観戦するんじゃなく、戦ええよ」
ヴィンセントはそう言うと再び小屋へと歩いていった。俺は少しの間その場に立っていたが、少しすると刀を抜き、柵の外へ出た。今からでも、少しでも戦えるようにしないと。しかし、森で動物を3体ほど倒した頃には既に体に限界を感じ、小屋に戻るとすぐに眠ってしまった。だが、不意打ちや作戦さえあれば俺にだって動物を簡単ではないが、倒せるということが分かっただけでもよかった。
……次の試練からは、足手まといになりたくなかった

起きたとき、頭ははっきりとしていた。俺は起き上がり、刀を持つと小屋の外へ出た。小屋の外では既に3人は火を囲み、食事をしていた。食事は何かの丸焼きのようで、大きさから見て、おそらく周りの森にいた生物だろう。

「おはよう」

「おはようさん」

俺が声をかけると、ヴィンセントだけは挨拶を返し、他の2人は顔だけを少しこちらへ向けると、すぐに丸焼きに視線を戻した。俺はどうしたらいいのか分からずに立ったままだったが、いきなりクリスが肉の乗った皿を渡してきた

「あ、ありがとう……」

いきなりのことで驚いたが、俺はクリスから皿を受け取り、ヴィンセントとクリスの間に座った。既にいくらかの部分が取られて原型をなくした丸焼きの生物だが、まだ原型を留めている部分を見てみる限り、おそらく豚なのだろう。俺は少し肉をかじってみた。味は……正直、調味料などないせいか、特に味はしない。

食事を食べ終わると少しだけ食休みを挟み、出発した。目指す方向は正しいのかは分からないが、森の中心。俺はいつでも敵が来てもいいように警戒しながら歩いたが、警戒心は数十分も持たなかった。しかし、それでよかったのかもしれない。森からは動物どころか虫さえおらず、風さえ起こっていなかった。ずっと警戒していれば、城に付く頃には疲れ果てていただろう。……が、それも次第に変わってきた。風がなく、虫1匹いないのに変わりはない。……けど、3人の空気が重くなってきた。会話がなく、ギクシャクしているのではなく、殺気に似た空気が満ち始めていた。初めはどうしてなのかは分からなかったけど、少し歩くとそれが分かった。森の先に城が見えたのだ。城……つまり、もうすぐ第3の試練が始まる。

城が見え、更に少し歩くと、俺が倒れていたとアリューさんが言っていた場所の2、3倍の広さの空き地に出た。そしてそこに、剣を地面に刺し、柄に両手を置いている人が立っていた。見た目的に

はアランと同じくらいの歳だろう。体には甲冑を着ているが、それでも筋肉は相当あり、地面に刺さっている剣で切りかかられれば、例え俺の刀で受け止めたとしても、ピコルの弾丸以上のスピードで吹き飛ばされるだろう。……いや、そもそも、刀ごと斬られるかもしれない。

男は目を瞑ったまま、黙って静止している。まるで俺達に気づいていないかのように。俺の隣では3人は既に武器を抜き、男に向けている。俺は一瞬、卑怯な行動だと思ったが、既に戦いは始まっているのだ。目の前に敵がいるのだから。

最初に動いたのはやはりヴィンセントだった。両手に構えた銃から一気に何発も弾を撃つ音がした。それと同時にピコルのときのようにアランとクリスが左右に飛ぶ。……が、2人の動きが止まった。いや、正確には4人。クリスとアランと……俺とヴィンセント。足が何かに絡められたわけではない。ただ、起こるはずのことが起こらないのだ。その異常さに4人の動きが止まった。ヴィンセントは確かに銃で男を撃った。……だが、男は揺れることもなく、ただ真っ直ぐに立っているだけだった。なのに……何も起こらない。回避しようともせず。弾こうともしなかった。。なのに、当たらなかったのだ。考えられる可能性はヴィンセントが外したことだけ。しかし、ヴィンセントの銃の腕は少ししか見てない俺でも完全に正確な射撃と思わせるほどの腕だった。

一番に気を取り直したのはヴィンセントだった。ヴィンセントは再び銃を構えると乱射した。

≪ダダダダダダダダダダダダダッ！≫

その音はマシンガンでもないのに、まるでマシンガンであるかのように鳴った。……が

「嘘……やろ……？」

結果は同じだった。弾は一発たりとも、男には当たらなかった。

「クリス！アラン！斬れ！」

が、今度は立ち直るのが早かった。ヴィンセントは叫び、2人に

攻撃を命令した。2人はようやくハッとなり、遠距離から男に斬りかかる。左右から横薙ぎに迫る長剣と短剣ほどの長さの刃。しかし、それでも男は動かなかった。2本の剣はドンドン迫っている。そして……男に当たる前にその2本は驚くべき変化を起こした。2本の剣はまるでそこにゆるやかな滑りやすい坂でもあるかのように、ゆっくりと角度を上へ曲げ、男の体にギリギリ当たらないように打ち上がった。そして打ち上がった剣は重力に乗り、下へ落ちた。

「……どうなっとんや」

ヴィンセントは信じられないものを見たように呟いたが、それは俺も同じだった。男は全く動いていないのに、アランとクリスの剣の軌道が変わったのだ。

「……気は済んだか？」

突如、目を瞑ったまま静止していた男が口を開いた。その声は想像以上に若く、また、突然声をかけられたことにも驚いた。男は無言で剣を地面から抜いた。その剣は何の変哲も無い、ただの剣のように見えたが、さっきのような現象を見せられた今では、それにさえ何かあるのではないかと思ってしまう。俺は刀を構え、いつでも動けるようにした。……が、男は予想外のことを言ってきた

「武器を収めろ。そしてここを去れ」

「……どういうことだ？」

アランが全員を代表するように聞いた。ピコルの話では、逃げ出せば次の試験官。つまりこの男が殺しに来ると言っていた。だが、この男はここから出て行けと言っている。

「私はこのゲームに興味がない。そして、人を殺すことにも興味が無い。よって、お互いに無駄なことはやめようではないかという提案だ。」

男は手に持っていた剣を鞘に収めながらそう言った。

「このゲームに興味がないですって？でも、このゲームを始めたのはそちらでしょ？」

「ピコルから聞いただろうが、私達はマスターに逆らうことはでき

ない。そして、このゲームを始めたのはマスター。」
「なら余計に逃がすのはやばいんやないか？逃げ出したら殺しにいかなあかんのやろ？」
「マスターから許可は下りた。だからここを去れ」
「……なんでそんなにもここから俺達をだそうとするんだ？」
「なぜ……だと……？」
俺が質問した瞬間、男は一瞬にして怒りを顕にし、俺を睨みつけてきた
「貴様らがこのゲームに参加する理由はソフィアであろう？」
男の言葉に誰も頷かなかった。……だが、ここにいる時点で目的はソフィア以外にないのだ。答える必要などない
「貴様らは……貴様らはあの女のことを考えたことがあるか？」
俺は少しの間、男の言葉が理解できなかった。あまりにも予想外すぎたのだ。あの男が、ソフィア……夏海のことを大切に思っている？攫ったのに？
「この際だ、教えておいてやろう。貴様らがソフィアと呼んでいる女は元々、私達の仲間だったのだ」
「嘘を付くな！」
男が言った瞬間、俺は反射的に叫んだ。隣のヴィンセントは勿論、アランもクリスも驚いていたが、そんなことは関係なかった。夏海は俺の幼馴染。こいつらの仲間なはずがない。
「嘘ではない。あの女の名前はアリサ。昔、強大な力を持って産まれ、間違いを起こし、追放された女だ。」
「……よう話が読めんのやけど、とりあえずソフィア……ああ、アリサやったな。アリサは元々あんさんらの仲間で、攫ったのも返してもらうためだってことか？」
「そうだ」
「せやけど、それとアリサのことを考えるのと、どう関係があるんや？」
「私はアリサを追放される以前から知っている。そしてアリサは常

に『大切な人のために生きたい』と言っていた。分かるか？ここには家族も、友人もいる。アリサにとって守りたい全てがここにある。だから、アリサのために去れ」
　男が言い終わった瞬間、俺は走り出していた。男の話が本当のことなのかどうかは分からない。男の言うアリサと夏海が一緒の人物なのか、似ているだけなのかも分からない。……けど、大切な人のために半永久的に眠らされていて幸せなはずはない。アリューさんのところで見たときも、幸せそうじゃなかった。俺は男を刀の間合いに入れた瞬間、思いっきり縦に切りかかった。アランやクリスの剣は上へズレた。なら、初めから上から叩きつける！
「愚か者が」
　が、切りかかった瞬間、男はいつの間にか剣を抜き、自分の頭と俺の刀の間に入れ、俺の刀を防いでいた。俺はすぐにこのまま力勝負をしても無駄だと思い、後ろへ飛ぶ
「そういうお前達こそ、1度追放したくせに自分勝手に連れ戻してるじゃないか！」
「追放というのは永久にではない。期限があったのだ。その期限がきたから連れ戻した。それだけだ」
「それこそ自分勝手じゃないか！アイツが向こうで大切なものを作っていたらとか、考えなかったのかよ！」
「……貴様如きが分かったような口をきくな！」
瞬間、男からの殺気が大きくなった。……が、俺は震えずに構える。確かに怖かった。だが、それでも引けない。俺からすれば、この男達こそ夏海を道具としてしか見ていないのだから。俺は男を睨み返し、隙を見つけるべく、集中する。しかし、先に動いたのは男だった。そのスピードは凄まじく、見えてはいたが、それだけだった。反射で動きはしたものの、間に合わないほどの速さ。斬られる。そう思った。……が
≪ダン！≫
頬を何かが掠めたかと思うと、男は迫ってきたときと同等なほどの

スピードで横へ避けた。
「感謝するで、ライ。あんさんが何を考えてるかは分からへんけど、ここまで来たんや。今更『はいそうですか』と帰れるわけないわ」
後ろから、煙を吹く銃を握ったヴィンセントが歩いてくるのが見えた。
「そうね。こういう『自分が正しいです』みたいな人は1度、ちゃんとお仕置きをしておかないと」
クリスの声がどこからか聞こえた。おそらく、この木々の間に隠れて攻撃のチャンスを待っているのだろう。アランも視界から消え、同様に隠れているのだろう
「そういうわけや。全員、帰る気はないようやで？」
「……愚か者どもが」
男は静かに、怒りを込め、そう呟いた

死闘

男の力は異常だった。力は勿論、他の考えられる限りの力が異常だった。剣を振れば目にも留まらぬ速さで剣が迫り、一撃で大木の半分を斬った。走り出せば一瞬とも思えるほどの時間で間合いを詰められた。……だが、速さだけならなんとかなった。男のスピードは直線的であり、自分の速さそのものを上手く扱えていないようだったからだ。そして、来るときには体を構える。来ると分かってこちらも構えていれば、ギリギリ避けられないことはない。ただ、避けられるだけだ。ちょっとでも目を離せば、油断すれば、次の瞬間には斬られている。おかげで俺は攻撃することもできない。辛うじて他の3人は攻撃できているが、最初のように弾かれている。とにかく、どういう原理で弾いているのかを解明しないと、この勝負は勝てない。俺は必死に攻撃をかわしながらも考える。……が、それはすぐに解明した。

「……貴様。ライウェン……新人類だな？」

アランの言葉に俺達と男は止まった。男は無表情に見えるが、驚いているようでもあった。

「貴様……どこで知った」

「貴様には関係ない」

アランがそう言った瞬間――

≪バチッ！≫

静電気のような音がした。そして、気がついたときには男はアランに切りかかっていた。明らかに、今まで以上のスピードだった。構えもなく、一瞬で動いた。まさか、本気じゃなかった？

≪バキ！≫

アランは寸でのところで剣を受け止めたが、アランの立っていた枝はその重さに耐え切れず、折れてアランと男は一緒に落ち、馬乗りになる形で男はアランを押さえ込む。俺は気づくのに一瞬遅れた

が、ヴィンセントとクリスはすぐさま攻撃のモーションへ移った……が

≪バチッ！≫

再び音が鳴ったときには男の姿はなく、アランだけが残った。俺はすぐさま辺りを見渡すが、どこにも男の姿は見えない

「アラン……なんや、ライウェンって」

ヴィンセントは辺りを警戒しながら聞いた。

「実際に会ったのは初めてだが、なんでも人類が進化した人類……らしい」

「……具体的にどう進化したか分かるの？」

「聞いた話では体内の物質を意のままに操り、放出できるらしい。そして、人それぞれで操れる物質も違うらしい。俺が聞いたのは火を作り出すというものだ」

「火を……作り出す？」

できるのか、そんなこと……。だけど、体内の物質を操るというのなら不可能ではない。昔、墓場の人魂は死んだ死体から出た『リン』という物質だと聞いたことがある。それを放出できるなら火を作り出せるだろう。

「……で？あいつの力は何か分かるの？」

「おそらく……電気を操るのだろう」

「電気？……ああ、それでさっきからバチッて音がするのね？……けど、体内の物質で電気を生成できるかしら？」

「……単純に静電気なんじゃないか？」

「え？」

俺の言葉にクリスが意外そうな顔をした。おそらく、俺が何か意見を言うとは思わなかったのだろう

「たぶん、静電気を操って足に送る電気信号を早くしているんだと思う」

漫画とかでもたまにそういうことができるキャラがいる。もっとも、漫画では電気そのものを扱うけど。だから、もし電気を操るこ

とができるなら可能だろう
「それに、電気ならヴィンセントやアラン、クリスの攻撃の軌道を曲げるのも可能じゃないか？体を＋か－の電荷にして、弾は反対の電荷。そうすれば磁石みたいに離れていくだろ？」
「……」
「……」
「……」
なんだか、３人が意外そうな目で俺を見ている。……まあ、元々役立たずだと思っていたみたいだしな。……戦闘に関しては本当に役立たずだけど
「……まあ、とりあえずや。アイツの力は電気を操るってことで、対策はどうするんや？わいらの武器、全員金属でできてるで？」
確かに。力が分かったとして、対策のしようがなければどうしようもない。問題は力の及ぶ範囲と大きさ。男はアランとクリスの攻撃を同時に曲げた。……つまり、同時に間逆の方向の物へ力を使い、尚且つ自分にも力を使うことはできるということ。
「っ！避けろ！」
アランの声でハッとなり、咄嗟に横へ飛んだ。その瞬間、俺はもちろん、ヴィンセント、アラン、クリスのいた位置へ何かが素早く通り過ぎた。
「なんや！？」
「！枝よ！大きさは小さいけど、凄いスピード！」
枝？……まさか、電気の力で限界まで腕の振りのスピードを上げて投げたのか？辺りを見渡しても男の姿は見えない。……が、１本の木に４つ、小さな穴が空いていた。おそらく、その木ごと貫通して飛んできたのだろう。俺はすぐに動いた。ジッとしていたら的にされるだけだ。３人の姿は既に見えない。俺は木から木へ飛び移りながら男を捜す。
≪バキッ！≫
その瞬間、どこかで音がした。おそらく、また枝を投げたのだろ

う。音からして木に刺さったようだ。俺はホッと安心した。……が
≪バキッ！≫
今度は俺目掛けて飛んできた。それも目の前を。おそらく、ホッとして動きが鈍らなければ当たっていた。……それにしても、なぜ男は見えるんだ？俺は枝の飛んできた方向を見たが、男の姿はどこにもない。
そのまま何分も逃げた。時折ヴィンセントたちは男を見つけたのか、攻撃する音がしたが、俺は男を見つけることができず、何度も枝を投げられた。それでもなんとか当たらずにいられた。……だが、遂に当たってしまった
「ぐっ！」
右肩を当てられた。枝は腕で止まることなく、後ろへ貫通したようで、左肩には穴だけが残った。俺は不安定な木の上で体制を保てず、落ちた。
「ライ！」
だが、俺が落ちると同時にヴィンセントが飛んできて、俺を空中で捕まえた。しかし、ヴィンセントは俺を支えることができず、結果、ヴィンセントもろとも地面に転がり落ちた。
≪ザッ≫
足音がした。痛みで苦しみながらも目を開けると男は右手に剣と左手に2本の枝を持ち、そこに立っていた。ヴィンセントは打ちどこが悪かったのか、気絶しているようで、動かなかった。……そして男は無言で剣を振り上げ――
「はぁっ！」
後ろから剣が2本、飛んできた。左右から1本ずつ、アランとクリスの剣が飛んできた。……だが、男は回避することもなく、その剣を弾き、手に持った枝を投げた。その2つは文字通り、投げたと思った瞬間には2人に刺さっており、2人は音もなく倒れ、地面に落ちた。
「あああああぁぁぁぁ！」

俺はその瞬間、切りかかった。仲間が殺されて我を失ったのかもしれない。いや、もしかしたら今しか殺せるチャンスはないと思ったのかもしれない。俺は思いっきり、刀を振り下ろした。……だが、その攻撃は弾かれることもなく、男の剣によって真っ二つにされ、隙だらけになった俺の腹を剣が通り過ぎた

「ぐっ！がぁぁぁぁ！」

お腹に今まで感じたことがないほどの痛みが走った。船でのシミュレーションのときの死んだとき以上の痛み。さっき左肩を抜かれた以上の痛み。俺は倒れこみ、お腹を抑える。だが、当然のように痛みは治まらない

「……これが、力の差だ。あのとき、アリサを諦めて去ればよかったものを」

男は俺へ呟くと同時に右肩を剣で刺す

「あああぁぁぁぁ！」

「貴様の浅ましく、卑しい気持ちがこの結果を招いた」

男は俺に説教をするように呟き、何度も何度も刺した。俺は途中まで反撃を狙っていたが、痛みでそんな考えさえ飛ぶ。更には、できればサッサと殺してほしいとまで思いだした。夏海のことなど、どうでもよくなってきてしまったのだ。……そして、最後の一撃がくる……

「貴様のような者は……死んで地獄へ堕ちるんだな」

男はそう呟き、剣を振り下ろす。俺は諦め、目を瞑った。できるなら、これ以上苦しまず、死にたかった。……が

≪ギン！≫

「何！？」

男の驚いた声と同時に、金属がぶつかる音がする。俺は突然の事態に驚き、目を開けた。……そしてそこにいたのは……影だった。薄暗い森の中だが、それ以上に暗い影。その影がいつの間にか錆びた剣を手に持ち、俺の前へ立って男に剣を向けていた。男は既に平静になり、剣を構える。数秒、お互いに静止していた。そして

……影が動いた。影の動きは早いわけではなかった。俺と同等。剣を剣道の脇構えのように構え、移動する。男はその場から動かず、剣すら構えない。影はそのまま近づき、剣を振り下ろす。……その瞬間、男の顔は再び驚きの顔に変わった。剣が……弾かれなかった。男は体を斬られる前に後ろへ飛んだ。だが、完全に弾けると思って構えていたのか、動きが遅れ、服が破れ、そこからは少しだけ血が流れていた。

「くっ！」

そして男は困惑していたためか、影が動いたことに直前まで気がつかなかった。男は迫り来る剣に気づいた瞬間、咄嗟に剣でガードする。……だが、影の力は予想以上に強かったのか、男は吹き飛ばされる。

「嘗めるなぁぁぁぁ！」

吹き飛ばされた次のときには男は目にも止まらぬ速さで影へ切りかかった。……いや、剣に斬りかかった。俺は一瞬、目を疑った。確かに男は剣へ切りかかったのだ。影は男が迫ってきたときにはまだ剣を振った状態。つまりバットを振った直後の状態のようなもの。そして、男は剣の中心辺りへ振り下ろしたのだ。ちょうど、影の左肩の辺りへ。それから何度もお互いが斬りかかった。影の握力や力は相当強いのか、剣は吹き飛ばされることがなく、鍔迫り合いになると男を吹き飛ばしていた。……だが、一番の問題はそこではなかった。男は確かに剣を狙っているのだ。鍔迫り合いで負けると分かり、鍔迫り合いになる前に剣を弾き、影の体勢を崩したと思うと、まるで剣を追うかのように影の横へ行き、剣を攻撃する。そして影に背後を取られ、それに驚きながらも防御する。そんな場面が程度や多少の状況は違えど何度もあった。

次第に、男の息が乱れてきた。影の方は『息をする』ということがあるのかは分からないが、平気そうだ。そして俺が勝てると思った瞬間――

≪バチッ！≫

男は俺の背後へ動いていた。そして影の手からは遂に剣は飛ばされ、俺の真横へ落ちる。おそらく、力のある影でも、あのスピードでの攻撃には耐えられなかったのだろう。俺は頭だけを後ろへ向けると、剣を杖に、膝を付いている男が映った。影は……相当衝撃が強かったのか、その場に蹲っていた。もしかしたら、男に見えないだけで、攻撃の影響はあるのかもしれない。俺は咄嗟に起き上がり、地面に刺さった剣を抜く。痛みはまだある。……けど、今はそんなことを気にしていられない。今なら勝てるかもしれないのだから。俺は体に鞭を打ち、剣を握って走る

「はあぁぁぁぁ！」

そして振り下ろす。

「っ！嘗めるなぁぁぁぁ！」

だが、すぐに男は気がつき、俺へ剣を振るう。そして、さっきまでの男のように、俺は吹き飛ばされる

「がっ！」

運悪く、俺は木に叩き付けられ、意識が飛びそうになるのをなんとか留める。

「はぁ！はぁ！……手品で剣を操つるのは終わりか？」

男は息を切らしながらそう言う。……そうか。やっぱり、男に影は見えていないのだ。男は迫ってくる。俺は立ち上がり、ふらつきながらも構える。

「貴様に勝ち目はない。今お前が剣を握っているということは、さっきまでの技が使えないということだ。貴様程度なら、今の私でも倒せる」

そんなことは分かっている。いくら弱っているとはいえ、もう一度さっきほどの力。……いや、その４分の１ほどの力で振り下ろされれば死ぬだろう。……だけど……

「何のまねだ？」

俺はしっかりと立ち、剣をバットを振るように構える。一撃で仕留めるため、カウンターで、自分が斬られたとしてもこちらも斬れ

るように。
「それでも俺は……次に夏海を助けに来る人のためにお前だけでも殺す！」
そう叫んだ瞬間、後ろで何かが光った。その光の元は俺の手の下だった。錆びた時とは間逆に、光は徐々に剣を覆う。
「無駄なことを！貴様に私を殺すことなどできん！」
男はそう叫んだ瞬間……消えた。そして俺は、本能のままに剣をいつの間にか振っていた。俺が気づいた時には決着が付いていた。いつの間にか剣を振り、腕が右回りに1回転し、骨が折れていた俺と……真っ二つに斬れ、物言わぬ死体となっていた男。
頭で状況を理解するのに数秒かかった。いつ振ったのかさえ自分で分からなかったのだ。1秒にも満たない間……まるで瞬きした次の瞬間には世界が変わっていたほどの感覚。それを数秒で理解した次の瞬間には腕の骨折の痛みで剣を落とし、倒れこみ叫んだ。意識が飛ぶ直前、視界の端に入った剣が錆びていき、男が塵のように消えていくのが見えた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8572z/

夢見る少女と最果ての少年

2012年1月9日19時42分発行